
門真一馬の愛すべき日常

丸いの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

門真一馬の愛すべき日常

【Nコード】

N2226Y

【作者名】

丸いの

【あらすじ】

門真一馬は、放送部に所属する普通の高校生。

今日も彼は、どうみても年下にしか見えない姉と共に、楽しい日々を過ごす。

5月上旬、火曜日

僕、こと門真^{カドマ}一馬^{カズマ}の朝は、だいたい騒々しい足音から始まる。

門真家二階、最も奥に僕の部屋はあるのだが。

朝になると、生まれたときからの知り合いである少女が、ドタドタと騒がしい足音を立ててそこへとやってくるのだ。ちなみにその音だけで、既に半分くらい僕は覚醒を促される。

無論それで終わるはずもなく、足音はそのまま僕の部屋まで辿り着くなり、追いつきをかけるようにノックも無くドアを開け放って、中へと流れ込んでくるのだ。

そしてその後は自称130cm（4月の身体測定によると正確には128cm）の小さな身体で僕の上半身に飛び乗って、少し焼けた両腕で僕の肩をつかんで全力で前後に揺らし、僕を起こすために騒ぐのだ。

「ほーら、カズマ！ もう朝だよ！ おーきーてー！」

聞こえてくるのは若干の舌足らずさが残る、鈴を鳴らしたような可愛らしい声。

……いや、鈴、と形容できるような微笑ましい音量ではないな。どっちかといえば……ベルを振り回したような綺麗な騒音、の方が的確だろう。

うん、こっちの方がしっくりくる。ベルを振り回したような綺麗な騒音。

「うあ……」

そんなことを考えながら、僕はその少女のいつも通りの起こし方に、いつも通りのうめき声で返した。

そのまま目を開けると、見慣れた姿が目に入ってくる。

身長は前述の通り約130cm、肌は少し焼けた薄い小麦色で、元気で健康的な子、というのが一目でわかる。

顔も整っており、美少女、と呼んで差し支えないレベルだと思う。

実際、別の事情もあるが学校でもかなり人気があるみたいだし。

顔のパーツの中でも特に印象深いのが勝気な感じを漂わせている釣り目だ。

その瞳は濁りの無い輝きが宿っていて、純粹そんな雰囲気を漂わせている。

髪は下ろすと肩くらいまでの長さがあり、普段は左右一対のリボンで縛られた——いわゆるツインテールにしている。

ちなみにリボンは日によって変えているようで、今日は無地の赤いものを付けていた。

少し記号的な表現をするなら、元気で可愛い小学せ……もいい。元気で可愛い少女、という感じだ。

「おはよう、カズマ！」

僕の目が開いたのを確認してから、その少女はいつも通りに元気良く、僕に朝の挨拶をする。

「うん、おはよう……」

僕も毎朝、僕を起こしてくれる少女……

「姉さん」

現在18歳で高校三年生である僕の姉、門真円マドカに朝の挨拶をした。

挨拶が済んだら姉さんを部屋から追い出して、制服に着替える。

あとり私立阿鳥学園高等学校。

それが僕と姉さんが通う高校の正式名称だ。

ちなみに男子の制服は普通のブレザー。

洗面所に行つて鏡を見ると、ちよつと童顔気味（高校三年生でありながらよく小学生と間違えられる姉さんほどではないが）な顔が映った。

髪型も昔馴染みの床屋のおっちゃん任せで坊ちゃん刈りになっているせいか、なおさら子どもっぽく見える。

身長は170cmあるから実年齢である15歳、学年で言つと高

校一年生未満に見られたことはないのだが、もう少し洒落っ気は出すべきかもしれない。

しかし面倒くさい、と思っているのが現状である。
顔を洗ったり歯を磨いたりしながら、僕はそんなことを考えていた。

それから姉さんと一緒に朝食を済ませて、二人で歩いて学校に向かう。

僕らが通う私立阿鳥学園高等学校、通称阿鳥学園について。

主な略称はアト学で、特色や特徴などは受験の時に貰ったパンフレットに書いてあった気もするが、特に覚えていない。

要するに、僕にとっては家から近いことだけが利点な普通の高校である。具体的には普通に歩いて15分。

「カズマ、そろそろ高校生活には慣れた？」

「うーん……まあ慣れたっちゃ慣れたかなあ」

いつもどおり、姉さんは他愛もない話題を振ってくる。

僕もいつもどおり、姉さんの会話に応じた。

「今日で入学してからちょうど一ヶ月だね。クラスメイトの友達とか出来た？」

「出来てるよ。ってか、色々話してるだろ」

「まあそうなんだけどさ。なにか新しい話ないの？」

そう言われて少し考える。

というかぶっちゃけ無い。

そもそも、高校に入ってからほとんど毎日姉さんと登下校しているのだ。

昨日あったことなら、昨日の下校時に話題にしている。

となると、真新しい話になりうるのは、以前に話し損ねたことくらいしかないのだ。

「んー……田中が授業中にケータイ鳴らした、って話はしたっけ？」
というわけで、ちょっと前のことで、話したかどうかがうる覚えな話題を出すことにした。

ちなみに校則では、ケータイは校内での使用は禁止である。

といっても割と甘い教師が多いのか、休み時間ならだいたい見逃してくれる。

しかしさすがに授業中に鳴らしたりすると没収され、放課後まで返してもらえない。

もともと、僕自身は没収されたことがないので聞いた話なのだが。「えっと、確か着信音が黒電話だったせいか、ケータイの音だと思われずスルーされた、って話だっけ？」

「そうそう、言ってたか」

「昨日聞いたよー。あ、それで思い出した。昨日さ、カナちゃんが」「カナちゃん？」

「うん、私のクラスメイトなんだけどね。その子もケータイ、うっかり授業中に鳴らしちゃってさ」

「ばれなかったの？」

思い出したと聞いてオチを予想した僕は、気付くとそう訊いていた。

「ん……」

姉さんは少し考え込んでから、改めて口を開く。

「えっと、先生にはバレなかったんだけど……」

「よかったじゃ……けど？」

途中までで感想を言おうとしたが、語尾が気になってオウム返しにする。

「えっとね、その着信音が着ボイスでさ」

「着ボイス……ああ、台詞を着信音にしてるやつだっけ。ユーガツタメール！　みたいな」

ちなみに僕の携帯の着信音はデフォルトの電子音だ。

「そうそう、そういうの。でもさ……それがなんていうの、どう聞いてもアニメのやつでさ」

「どう聞いても……って、どんなだったの？」

「なんか必殺技っぽかった。可愛い女の子の声で、スターライ

ト・ブラスター！！とか聴こえてきた」

「……授業中にそんな聞こえて、よくバレなかったね」
どう考えても授業中に発せられる台詞ではない。

「ああ……その子、その時は机に突っ伏してたからさ。『ね、寝言です！』って言いわけでごまかしてた」

「どんな寝言だよ……」

思わず隣の席からそんな寝言が聞こえてくる事態を想像する。

うん、僕なら迷わず突っ込む。

「それで『そうか、目は覚めたか？』とだけ言っスルーする先生も相当なツワモノだとは思っただけだね……」って、まあそうじゃなくて。それでその子、ケータイは没収されなかったんだけどオタクだつてのがバレちゃってさ。クラスの……男子のオタクグループを毛嫌いしてた女の子達がどう接するか迷ってた。なんかぎこちなかったよ」

「へえ……姉さんも？」

姉さんがそんなことで人を嫌いになるとは思わないけど。

「まさか。ってか私も人のこと言えないし」

「だよねえ」

僕はあつさりと納得の意を示す。

そもそも姉さん自身、若干アニメオタクの気があるのだから。

なにしろ夕方の子供向けのものでなく、マニアックな深夜放送のヤツまで観ているくらいなのだから。

別に観るのはかまわないんだけど、うっかりホラー系を観てしまつて、怖くなつたからといって深夜三時頃に僕を叩き起こしてトイレについていかせるのはやめて欲しい。

「でも私は、それを言ってもオタク扱いされないんだよね」

不思議そうに姉さんは呟く。

「そりゃもちろん」

僕は一つの真理を語ってやることにした。

「高校生にもなつてアニメが好きだ、って公言するのは少々違和感

があるけど、姉さんなら見た目から言っただけ違和感無い。むしろ相応し——いたっ!？」

言い終える直前くらいで、こめかみに激痛が走った。

どうやら姉さん必殺の、上段飛び回し蹴りを食らったようだ。

短いスカートで飛び回し蹴りなんて放ったわけだから当然、可愛らしいクマさんが丸見えになったが姉さんは気にする様子もない。

もっとも僕自身、いまさら姉の下着など見たって嬉しくもなんとも無いのだが。

むしろ身内として恥ずかしいからもう少し慎みというものを身につけて欲しいと思う。

というか、こめかみを爪先で貫かれたのが効いていて、その場へたり込んでいた。

「誰が小学生ですって!？」

だが僕のそんな様子を気にも留めず、姉さんは怒りをあらわにして僕を怒鳴りつけていた。

「それは言っていない……けど下着だって可愛いクマさんだったじゃないかつ、それで自分が子どもっぽくないなんてよく言えるね!」

僕も感情に任せて怒鳴り返す。

こめかみへの一撃が効いていて、若干キレていた。

「なによ、やるの!？」

姉さんはそう言いながらファイティングポーズを取る。

その構えは両腕を垂直にあげて顔を守るような体勢で、しいて言うならキックボクシングのそれに近い。

しかし手首が前に曲がっているせいか、どちらかといえばなんか招き猫っぽくなってしまっていた。

「望むところだ!」

僕も構える。

こっちは特にひねりのない、あえて言うなら普通のボクシングのファイティングポーズだ。

姉さんは小さい身体とすばしっこさを活かして、確実に急所を貫く一撃必殺型の戦い方を得意としている。

だから懷に潜り込まれないようにある程度間合いを取れば、リチの差でこっちのほうが有利になる。

つまり、いかに近づかせないかが勝負の分かれ目となる。

それはわかつているのだ……いける！　そう思いながら、姉さんとにらみ合う。

そして先手を取ろうと一歩踏み出し、姉さんに横薙ぎの手刀を当てようとした瞬間。

「おっはよう、二人とも！」

突然の襲撃者に姉さんもろとも抱きしめられて、身動きが取れなくなっていた。

「むぎゅう」

「わ、ひ、ヒロコさん？」

僕は思わず、僕らを抱きしめた人の名前を呼ぶ。

「そのとおり、みんな大好きヒロコさんですよ。二人とも、朝から元気そうね？」

姉さんは顔がヒロコさんの胸に埋もれてしまっていて、まともに喋ることすら出来ないようだった。

サクラビロウ
桜ノ宮広子。

姉さんと同じく三年生で、僕と姉さんが所属している放送部の副部长だ（ちなみに部長は姉さん）。

豹のような妖艶で深みのある瞳と、綺麗と表現するのが相応しい整った顔立ち。

背は僕より少し高いくらいで、出るところは出ていて引つ込むところは引つ込んでいる、女性としては一つの完成型と言える理想的な体型。

髪型はショートカットで口調もどこか男っぽいのだが、色気のあふれる声とついつい目がいく大きな胸で性別を間違われることはまずないだろう。

もう一度言うが、これで姉さんと同年である。

正直僕も信じられない。なんというか両極端な二人だと思う。

「えっと、おはようございます」

ヒロコさんの乱入で戦意を失った僕は、ヒロコさんのホールドから抜け出しつつ挨拶をした。

「うん、おはよう！　そして弟くんはちゃんと挨拶したのに、お姉ちゃんは挨拶しないってのはどういうことなの、マドカ？」

ヒロコさんは元気に返しつつ、相変わらず顔を胸にうずめたままの姉さんに話しかける。

「むぎゅー！」

姉さんが何か言っている。

というか、良く見るとヒロコさんの肩をタップしている。
凄く、必死そうに。

もしや、と思つて僕はヒロコさんの顔を見る。

なんかいやらしい笑みを浮かべていた。

……ああ。つまりヒロコさん、姉さんで遊んでいるのか。

こんな時、弟として僕がとるべき行動は一つだ。

「じゃあヒロコさん、僕、先に行きますね」

迷わずエスケープ。

ほら、昔から触らぬ神に祟り無しって言うしね。

「待った」

しかし止められてしまう。

「なんでしょ」

僕は迷わず、心底嫌そうに返した。

もちろん嫌な予感しかしないからだ。

「お姉さんが苦しんでるみたいだけど、放っておいていいの？」

僕の予感通り、ヒロコさんは挑発するような目で僕に面倒なことを言ってくる。

「じゃあ放してあげてください」

ため息混じりに僕はそう返す。

すると、ヒロコさんはニヤリ、という嫌な笑みを浮かべて。

「ど・こ・か・ら？」

なんてことを、無駄に色っぽく、わざわざ僕の耳元で囁きやがった。

どうやらヒロコさん、中学を卒業してすぐのいたいけな男子高校生に、女子高生に面と向かって「胸」と言わせたいらしい。

こ、このセクハラ野郎め……いや野郎じゃないけど。

「……む、ねから……」

なんだか恥ずかしくなって、顔を逸らしながら言う。

「きこえなーい」

そんな控えめな僕に、ヒロコさんは凄く愉しそうな調子で返した。
あああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ！

「ヒロコさんの、む、胸から姉さんを放してあげてください！」

半ばやけくそ気味に言い放つ。

「はーいはい、っと」

それを聞いて満足したのか、ようやくヒロコさんは腕のチカラを解いて姉さんを解放する。

「きゅっ……」

どうやら息すら出来ていなかったらしく、姉さんが目を回していた。

「はっはっは、うん、やっぱ君ら姉弟はからかいがいがあるねえ」

嬉しそうに言ったヒロコさんを取りあえず睨みつけておく。ヒロ

コさんはいつもこんな調子だ。

「カズマもわざわざ、胸、って言うてくれるし。『腕』って言えばいいのに」

そしてすぐに視線を逸らした。

自分でも顔が赤くなっているのがわかる。

くそう、ヒロコさんが普段エロいことばかり言うてるから、どうしてもそっちに意識が……ッ！

さらに僕の考えていることもお見通しらしく、ヒロコさんはまたニヤニヤといやらしい笑みを浮かべていた。

「さてと、じゃ今朝はこの辺にしておくかな。じゃあ二人とも、また部活で！」

それで満足したらしく、ヒロコさんはそう言い残して、あっさり行ってしまった。

僕はその後、少しふらついている姉さんを軽く介抱してから学校まで走ったのだった。

一限目終了後の休み時間。

「おはようございます、カズマさん。お疲れのようですね？」
自分の机に突っ伏して、だらーっとしていた僕に、声かけられる。

のんびり弾いたピアノのような、聞いているとどこか落ち着く綺麗な声だった。

「おはよう、シズネ」

僕は声の主の名前を呼びながら、ゆっくりと身体を起こす。
顔を上げて、声の主を見る。

そこには、姉さんともヒロコさんとも違う雰囲気を持つ少女がいた。

シズネ
桜ノ宮静音。

身長は僕より拳一つ分くらい低いのだが、髪は長く腰辺りまで、ストレートにしてある。

艶があって、さらさらに綺麗な黒髪なので、そのシンプルな髪型はむしろよく似合っていた。

顔の特徴としては、少し眠そうなたれ目と、銀縁の眼鏡。

さらに標準装備の笑顔が朗らかな雰囲気をもし出していて、一緒にいるとなんだか落ち着く。

これでヒロコさんの妹だというのだから驚きだ。

「駄目ですよ、カズマさん。夜は早めに寝ておかないと、翌日が辛いですよ?」

「いや、別に夜更かししたわけじゃないんだけど……」
ぐったりしているのは貴女の姉が原因です、とは思っても言わない。

「そうそう、マドカさんに勧められて深夜3時くらいにやってるアニメを観てみたんですが……けっこう面白いですね」

「ちよつと待て、さっき自分が何を言ったか思い出すんだ」
思わず突っ込む。

対するシズネは何がおかしいのか気付いていないようで、不思議そうに首をかしげていた。

その仕草は可愛いのだが、それを堪能するより先に僕は前言を一つ撤回しておこうと思う。

シズネは落着きがあつて優しいという、1つの『理想の女の子』を地で行っているような節があるのだが、いかんせんマイペースすぎて会話のキャッチボールが成立しないという目を瞑りがたい欠点がある。

つまりまともに会話していると疲れるのだ。突っ込む点が多すぎて。

「それにしても……最近、下着を着けないのが普通なのでしょうか」

「は?」

ああ、またシズネさんが何か言い出した。

「昨晚観ていたアニメで、角度的に下着が見えているはずの場面があつたんですが、肌の色しか映っていないくて」

……なんて説明したらいいんだろう。

っていうか、僕も姉さんに誘われてたまに観てはいるんだけど、興味無いやつは流し見だったりウトウトしながらだったりするのであまり詳しくはない。

姉さんに聞いたら詳しく語ってくれそうな気もするんだけど。

ってかシズネさんどこを見てるんですか。やっぱりこの人、ヒロコさんの妹だ。

「えっと……」

「そうそう、昨日のお夕飯なんですが——」

「おおーい！」

返答を迷っている間（数えてなかったけど多分十秒未満）に次の話題に移ってしまった。

まあ答えも思いつかないしいいか。

そのまま相槌という名の突っ込みを返しながら、僕は楽しくも疲れる休み時間を過ごしたのだった。

そんな感じで午前中の授業が終わり、昼休み。

他のクラスメイトたちが弁当箱を開いたり購買や食堂に向かって走り出す中、シズネも僕に声をかけてくる。

「参りましょうか、カズマさん」

「うん、行こう」

簡潔に返す僕。

どこになんて聞き返す必要は無い。

行き先は、既に決まっているから。

そう。

僕と姉さんと、ヒロコさんだけでは無い。
シズネもまた、放送部のメンバーなのだ。

—— 続く。

5月上旬、火曜日（後書き）

初投稿作品、いかがだったでしょうか。
楽しんでいただけたのなら幸いです。

5月上旬、火曜日2（前書き）

時系列的には1話の直後。

放送部メンバーは6人で全員です、2話現在。

5月上旬、火曜日2

昼休み。

僕は放送部の一員として、放送室にいた。
というか今着いた。

室内では、既に二人の先輩が今日の放送の準備を始めている。

一人は良い意味で高校生っぽくないグラマラスな外見と、セクハラエロオヤジな内面を持つ副部長、ヒロコさんこと桜ノ宮^{サクラノミヤ}広子。

もう一人は小柄すぎて小学生にしか見えない三年生で放送部の部長、姉^{カドメツカ}さんこと門真円。

二人とも今は、ちょうど今日使う予定の資料を選出しているところだった。

「あれ、シズネは？」

現れたのが僕一人だったのが不思議だったのか、着くと同時にヒロコさんが僕にそう訊ねてくる。

「もうすぐ来ると思いますよ。ちょっと寄り道していく、って言うてましたし」

確かに教室を出た時は一緒だった。ただ途中で別行動になっただけだ。

「寄り道か……トイレだな。あの子昔からそう言うし」

「ヒロコ……それは察しても言わないであげてよ」

ヒロコさんの余計な明言化に、姉さんが呆れ気味に突っ込む。

「いや、そう言うておけば、今度シズネがそう言ったときにカズマが想像するじゃん」

するとヒロコさんは、愉しそうにそう言い放った。

「……………」

ヒロコさんのセクハラ発言はいつものことなので、僕は反応せずスルーすることにした。

「カズマもそこで顔を赤くしない！」

……スルー出来ていなかった。

というか姉さん、指摘しないで。スルーしたいんだから。

「あ、シズネちゃん。こんにちは」

とか思っていると、今度は僕の背後に向かって挨拶した。

振り返ると、そこには清楚で可憐なお嬢様という感じの少女、同じクラスのシズネがいた。

「こんにちは。あれ、カズマさん、顔が赤いですよ？ 具合でも悪いんですか？」

「な、なんでもないよ！」

僕の顔を見て不思議に思ったのか、シズネは訊ねてくる。

言ってるそばからシズネが現れて動揺したのか、どう考えても怪しい返事をしてしまった。

「そうですか……キョウさんとメイさんはまだなんですか？」

しかし相手はやっぱりシズネだった。

僕の怪しすぎる対応を気にする様子も無く、すぐに自分に興味のある話題を持ち出している。

たまにこの図太さというかマイペースさが羨ましくなるのは内緒だ。

「んー、何も訊いてないし、そろそろ来るんじゃない？」

その問いに、姉さんがやや投げやりに答えた。

「んー、でもちよつと遅すぎない？ キョウさんたち、何かあったんじゃない」

気になったので訊ねた、その直後。

「呼んだか？ カズマ」

「カズマ、邪魔。そこいて！」

それに答えるように、背後から二つの声が聴こえた。

一つはだるそうだがどこか温かみのある、男らしい低い声。

もう一つはハキハキしていて良く通る、女の子の声だ。

振り返ると、ドアのすぐ前に見慣れてきた二人の先輩が立っ

た。

片一方は守口^{モリグチ}響。僕より一つ上の二年生。

身長はぱつと見て180cmくらいと僕より高いのだが、その体つきは中肉中背な体格をしている僕と同等くらいの細さである。

しかしお昼の放送中である20分間、ずっとBGM担当としてギターを掻き鳴らしていることを考えると、痩せているわけではなく、余分な肉がつきにくい体質なのだろう。

顔つきも細めで、美形といえるくらいに整っている。

だが目が隠れるほどに長い前髪とどこか気だるそうな表情で、初見だと近寄りがたいくらいに怖い雰囲気をも少し出していた。

その物憂げな表情などで女生徒に人気らしいのだが、彼女がいるという話は聞いたことがない。

そしてもう1人、は守口^{メイ}鳴。

キョウさんの双子の妹らしく、顔つきもキョウさんを少し丸くしたような感じになっている。

キョウさんに比べると少し幼い感じがするが、それがむしろ女の子としての可愛らしさを引き立てていて、可愛いとも綺麗ともいえる顔になっていた。

身長は姉さんより拳二つ分くらい高く、髪はピンクのリボンで縛ってポニーテールにしてある。

体つきも森口家の遺伝なのだろうか、キョウさん同様かなり細い。スリーサイズはぶっちゃけ幼児体型な姉さんと互角だ。

……遠回しに表現したら、かえってわかりにくくなった気がする。というわけでストレートに言い直そう。

かなりの貧乳だ。

ぼん、きゅ、ぼん、って表現に倣って表すならきゅ、きゅ、きゅ、って感じ。

顔つきもちよつと凜々しいところがあるので、ボーイッシュな格好をしたら性別を間違えられるかもしれない……

「カズマ。今何か、失礼なこと考えてない？」

「い、いえ！ 何も！」

そんなことを考えていると、メイさんに睨まれた。

鋭い……。

「まあまあ。みんなそろったんだし、始めようよ」

そんなメイさんの視線に気付いたのか、姉さんが全員に向けて言い放った。

メイさんは渋々といった感じだが、それに従い、はい、と簡潔に返事をしてから持ち場に移動する。

それに連なつて、他のメンバーもわかりましただのはーいだのおうよ、だのと各々返事をして持ち場に移動していた。

僕と姉さんはマイクのある席。その少し後ろにBGM担当のキョウさんがアコースティックギターを構えて、その辺のイスを引っ張り出してきて座る。その隣に同じくイスを引っ張り出してきてメイさんが座り、ヒロコさんとシズネは少し離れたところで打ち合わせを始めた。

「よし、準備はできたね。始めるよ！」

言いながら、姉さんはマイクの横にある「On Air」と書かれたボタンを押す。

さあ、これでお昼の放送スタートだ。

「やつほーみんな、元気ー？ 放送部部长、マドカです！」

姉さんがハイテンションに、マイクに向かって話しかける。

それと同時に、キョウさんがなんだか楽しそうな、三拍子の曲を奏でていた。

他の高校はどうなってるのか知らないが、僕らの『お昼の放送』はどこかラジオリミタ雰囲気のものだ。

「部員のカズマです。今日は生徒会からの伝言はないので、早速最初のコーナーに入りたいと思います」

そう言いながら、姉さんに目で合図する。

「おれの話の聞けえ！ 略して！ オレハナのコーナー！」

僕の合図を見た姉さんは、舌つ足らずでありながらもハイテンションな声でタイトルコールをした。

でもその声で『おれ』って言うのはなんていうか微笑ましすぎると思う。

「イエイー！」

そんなことを考えながら、僕も乗る。

「はい、皆さんからの投稿を読み、それについて語ったり、突っ込んだり、そのまま終わったりするオレハナのコーナーです」

そしてすかさず落ち着いた雰囲気を作り、『オレハナコーナー』の趣旨を解説した。

放送部の部室前には手紙を入れる穴が開いた木箱、通称目安箱が設置されている。

さらに僕らの放送は学園でも人気らしくて、毎回結構な数の手紙が来るのだ。

だから今では、放送時のコンテンツは全てその手紙を使ったものになっていた。

ちなみにコーナーは三つあり、兄弟姉妹ごとに一つを担当している。

そして僕と姉さんの担当がこの『オレハナコーナー』なのだ。

「じゃあ力ズマ、最初のお便り読むね。ペンネーム」かつて佐藤と呼ばれた鈴木』さん……ペンネームから突っ込むべき？」

なんとというかアレなペンネームに、姉さんが意見を求めてきた。「触れないでにおいてあげようよ、きっと複雑な家庭事情があるんだよ」

各コーナーの時間は5分。

変に脱線すると時間が足りなくなるため、スルーさせるするつもりで僕は言う。

しかし姉さんはそれに感心したらしく、どこか寂しそうに「そだね」と呟いてから再び手紙の朗読を再開した。

「ごめん姉さん、そこで本当に複雑な家庭事情を想像しないであげて。」

「『放送部の皆さん、こんにちは。最近、家で飼ってるミリアキヤツトのタマが可愛くてしかたありません』 あは、にゃんこ自慢だ」冒頭を読み終えてから、姉さんが嬉しそうに感想を漏らした。

ウチにもフアングという名前のトラネコがいるので、ネコの話題は親近感が沸くらしい…… ってちよつと待て。

「姉さん、ミリアキヤツトはネコじゃない」

「え？ みーあ、って鳴くにゃんこじゃないの？」

心底不思議そうに姉さんは言った。

ちなみにこのバカ姉は本気で言っている。

「違うよ！ ミリアキヤツトはマングース科だよ！」

「カズマ、詳しいな」

ギターを演奏しながら、感心したようにキョウさんが呟く。

「む」

その直後に何故か、メイさんに睨まれた。
なんで？

「まあいいか。えつと」

困惑する僕を放つたらかしにすることで強引に話を戻し、姉さんは続きを読み始めた。

お便りの内容を要約すると、ゲームをしていたり、本を読んだりするとミリアキヤツトが遊んで欲しそうにじゃれてくる、というものだった。

「あー、これはわかる。可愛いよね」

そして読み終えてすぐに、姉さんが嬉しそうに感想を漏らした。隣を見ると、とてもいい笑顔をしている。

思い出してみれば、姉さんも家では同じような感じだった。

「フアングも、姉さんがリビングでごろごろしながらテレビ見てたらじゃれついてくるもんね。昨日も確か、うつ伏せに寝てる姉さんの背中に乗っていたっけ」

「ちょっとカズマ、余計なとこまで言わなくていいの！」

僕の言い草にどこか恥ずかしい点があったのか、姉さんは一転して赤い顔でそう言った。

あ、これは掘り下げると放送中に姉弟喧嘩をすることになりそうだ。

というわけで。

「思ったより長かったし、今日のオレハナのコーナーはここまでかな」

「カーブズマー！」

こういう時は、さらっと話を流すに限る。

「ほら姉さん、次のコーナー入るよ」

そう言いながら、シズネとヒロコさんに目で合図すると、それにいち早く気付いたヒロコさんが姉さんを押しのけてマイクに向かった。

「よし、じゃあ次は！ ヒロコとシズネの！ お悩み相談、略してナヤソーのコーナー！」

そして手早く、自分たちが担当するコーナーのタイトルコールをする。

それにあわせて、僕と姉さんはマイクから離れた位置にある、待機中のメンバー用の席へと向かった。

「く……カズマ、ヒロコ……覚えてなさいよ……」

姉さんが何か言っていたが、今は気にしないことにした。

「匿名お悩み相談のコーナーは、文字通り匿名で寄せられたお悩みに、私たち桜ノ宮姉妹が答えるコーナーです」

シズネの解説を、ヒロコさんが引き継ぐ。

「ちなみに略称がオナソーでなくてナヤソーなのは、オナソーだとなんかエロいたッ！？」

昼食時に相応しくない発言をしようとしたヒロコさんを、姉さんが後ろから高速で水平チョップした。

ブンツ、と風を切る音がし、ヒロコさんの……早すぎてよく見え

なかったが、多分後頭部を直撃したんだと思う。

「失礼しました。じゃあシズネちゃん、続きをお願いね」

そして妙に良い笑顔でシズネにそう告げて、再び待機メンバー用の後ろの席へと下がった。

どうやら、さっきの仕返しも兼ねていたらしい。

「あ、はい。えっと、では最初のお便りを」

そしてシズネはシズネで特に気にすることも無く、淡々とコーナ―を進めていた。

なんだかんだでシズネは大物だと思う。

「あ、アタシが読むよ」

と思つたら、あっさりヒロコさんは復活して横から手紙を奪い取り、読み始めた。

なんというか、タフな人だった。

「えーっと、ペンネーム『恋する乙女』さん。おお、恋愛相談だ」

その手の話題が好きなのか、ヒロコさんの声が弾んでいる。

「『放送部の皆さん、こんにちは』 こんにちは」

「こんにちは」

ヒロコさんが挨拶を返すのに合わせて、シズネも挨拶をする。

「『最近、好きな人が出来ました』 いいねえいいねえ。青春だねえ」

ヒロコさん、なんていうか反応が女子高生じゃないです。

「『でも、その人には彼氏がいるみたいです。どうしたらいいのでしょうか』……か。うん」

一度沈黙するヒロコさん。

ちよつと考えているらしい。

「……ごめん、ちよつともう一回読む時間をください」

普段は姉御肌で言動もなんだか男らしいヒロコさんが、急に丁寧な喋り方でそう言った。

そして言うが早いか、黙って真剣な表情で手紙を読み直している。良く見ると、冷や汗をかいているようにも見える。

……僕も今のうちにちょっと今の内容を整理しようと思う。

えっと、投稿者が『恋する乙女』さん。ペンネームから察するに女性だろう。

そして悩みは。好きな人が、彼氏がいるような人である、ってこと。

彼氏……好きな人に、彼氏が、か……。

「……………」

誰かフォローできる人はいないか、と思いながら全員顔を见回す。

ヒロコさん本人は珍しく、難しそうな顔をしている。

仕方ないよね。僕も正直、なんて答えればいいのかわからない。

ヒロコさん同様にナヤソーコーナーの担当、シズネでもさすがにこれは困ってるに違いない……そう思って彼女に視線を移す。

すると、なんとシズネはなぜヒロコさんがそうしているのかが分かっていないようで、きょんとしていた。

相変わらずの大物だが、フォローする気も無さそうだ。

キョウさんのギターも、さっきから曲が安定しておらず、ころころと変わっていた。

BGMの曲調を決めかねているようだった。

メイさんはペットボトルの水を飲んでいる。

姉さんはさっきの手紙で恋しくなったのか、携帯でファングの写真を見て微笑んでいた。

って、メイさんと姉さんは聞いてすらない！？

なんていうか清々しいくらいに……ヒロコさんに助け舟を出せる人がいないことが確定した。

仕方ない。ここはヒロコさんの底力に期待しよう。

「……えーっと」

少しの沈黙の後、ヒロコさんが口を開く。

どうするんだろう。

ヒロコさんの判断は――

「好きなら奪い取っちゃえばいいと思うよ、うん。以上！ シズネ、次！」

強引に流した！

僕も人のことを言えないけど、うちの部は『強引に流す』という手段を愛用する人多すぎだと思う。

「はい、じゃあ次のお便りは……」

そしてシズネもそれにあっさり応える。

なんていうか、豪胆な姉妹だった。

「はい、じゃあ今日のナヤソーコーナーはここまで！ みんなもなにか悩みがあったら、一人で悩まずアタシらに相談しろよ！」

もう一つの手紙に答えてから、ヒロコさんはそう締めくくった。

これで桜ノ宮姉妹担当のコーナーも終了だ。

桜ノ宮姉妹は後ろの席へ移動し、守口兄妹ことキョウさんとメイさんの二人がマイクに近づく。

「キョウと」

「メイの！」

「「うるおば演奏！」」

それから二人でタイトルコール。

盛り上げる前提のため、キョウさんは適当にギターをかき鳴らしていた。

「というわけで、うるおば演奏のコーナーです。このコーナーは、皆さんのリクエストした曲を俺のギターとメイのボーカルで再現する、そんなコーナーです」

まずキョウさんがコーナーの解説をする。

「本日は、ペンネーム『水木カナ大好き』さんのリクエスト、水木カナさんの『Hug and Love!』です」

その後すぐ、メイさんが今日のリクエスト曲を発表した。

水木カナは最近流行りの女性アイドルだ。

また『Hug and Love!』は恋する少女のまっすぐな気持ちを歌った歌で、テンポが良くて歌詞も可愛らしく、聴いていて楽しい。

「いくぞ、メイ」

ギターを構えたキョウさんが、メイさんに合図。

「ん。ワン、ツー」

それを受け、リズムをあわせるためのカウントをメイさんが始めて。

「ワン、ツー、スリー、ハッ！」

それに合わせてキョウさんの声が重なり、キョウさんのギターによる前奏から曲が始まる。

そして水木カナの曲は全体的に前奏が短いので、すぐに歌が入る。
「今すぐ君を」抱きしめたい」

メイさんは年齢相応の無垢な可愛らしさと、女性らしい綺麗な高音を絶妙に合わせ持った、いい声をしている。

姉さんも『可愛い声』をしてはいるのだが、どちらかといえば子ども特有の微笑ましさ、といった方がしっくりくるのだ。

「hug and Love! 飛び込むからね」

また、『うろおば演奏』と言ってるわりには二人ともちゃんと練習してきているようで、かなり巧い。

完璧に原曲を再現できているわけではないのだが、どちらかがミスをしたときにもう片方が巧く合わせて、まるでそういうアレンジだ、とでもいうようにごまかして、平然と続けているのだ。

というか、僕自身も放送部に入っただけはそれの『ごまかし』に気付いていなかった。

最近になってから、原曲からアレンジされていると思った時のメイさんの照れ笑いや、キョウさんのちよつとすまなそうな表情を見て勘付き。

さらに姉さんが『あ、またごまかしてる』と隣で茶化すように呟いたので確信できた、というのが正直なところだ。

「愛してあげるー！」

メイさんが最後のフレーズを叫ぶ。

そしてその興奮が冷めないままキョウさんがノリノリで後奏を弾き切って、演奏は終わった。

やっぱりこの二人は巧い。

「水木カナの、『Hug and Love!』でした！ ありがとうございました！」

そして締めめの挨拶を終始息ぴったりに決めて、今日のうろお婆演奏のコーナーも終了である。

そして担当コーナーが終わると、キョウさんはマイクから離れてBGM担当に戻り、メイさんはその隣に移動した。

「さーて、本日もそろそろ、お別れの時間がやってまいりました」そして部長として締めめの挨拶をするべく、姉さんが再びマイクに向かった。

キョウさんもそれに合わせて、落ち着いた雰囲気曲を奏でている。

ちなみに締めめの挨拶は姉さんのみの担当なので、僕は下がったままである。

「担当はいつもどおり放送部全員、門真円、一馬、桜ノ宮広子、静音、守口響、鳴の六人でお送りしました」

こうやって真剣に締めめの挨拶をしている姉さんを見ると、改めて姉さんが部長であることを再確認させられる。

普段は子どもっぽくてわがままで、バカな言動も多いけど。

それでもやっぱり、僕の姉で、先輩なんだなって思う。

だから僕は、姉さんが真面目に締めめの挨拶をするこの瞬間がどこか好きだった。

「というわきゃで」

……感心するときに噛まないでよ。

「こほん……というわけで。今日の放送はここまで！ 次の放送をお楽しみに！ ありがとうございました！」

そして噛んだことをごまかそうとしているのか、少し早口で締めくくる。

やっぱ駄目だ、この姉。

……まあ、とりあえず。

本日の放送も、なんとか無事に終わったのであった。

—— 続く。

5月上旬、火曜日2（後書き）

2話は以上になります。

楽しんでいただけたでしょうか？

5月下旬、水曜日

水曜日、放課後。

僕、門真^{カドマ}一馬^{カスマ}は放送室の隣、放送準備室にいた。

放送準備室は放送部の部室だ。

元々は文字通り、放送時に使う小道具を置いておくところだった
り、放送する人が発声練習するための場所だったらしいのだが、姉
さんが一年生だった頃に放送部が占拠したとか不穏なエピソードを
聞かされている。

しかしその後何も無く今に至っているため、特に問題はない……
ののだと思う。

信じることって大事だね。

室内にはいつも通り、放送部のメンバー全員が集まっているし。

「よし、じゃあ定例会、始めるよー」

そう言ったのは、見た目は子ども、中身も子どもな僕の姉さん。
服装次第では小学生と間違えられても不思議じゃない小柄さだが
これでも放送部の部長で、自慢のツインテールを今日は水色の玉が
ついた髪留めで止めていた。

ちなみに名前は門真^{カドマ}円^{ドカ}だ。

「じゃあとりあえず、目安箱開けるよ」

姉さんの開始の合図に答えて、姉さんの隣で木製の箱についてい
た南京錠を外したのは桜ノ宮^{サクラノミヤ}広子^{ヒロコ}さんだ。

姉さんと同じ3年生で副部長、色っぽいお姉さんという表現がし
っくりくる人で、発言の傾向から歩くセクハラ親父の異名を持つ……
僕が勝手に心の中で呼んでいるだけだ。

部屋には長机が三つ、「コ」の字型に置かれていて、姉さんとヒ
ロコさんは縦線に当たる位置に座っていた。

なんでもそこが3年生の固定席らしい。

ちょうど中心に近い位置なので、納得といえば納得かもしれない。そんなことを考えていると、ヒロコさんが荒っぽい仕草で目安箱をひっくり返した。

中から50通くらいの手紙が落ちてくる。

もちろん、お昼の放送中のコーナー用のお手紙だ。

「今日はいつもより多いですね」

僕のちよとど対面にいる、細身でちよと冷たそうな感じの2年生、モリグキョウ守口響さんが手紙を見て呟くように言う。

声のトーンが独り言っぽかったので、返事をするかちよと迷う。

「そうだね、キョウ」

その間に、代わりにキョウさんの隣にいたポニーテールの少女がどこか甘えるような声と仕草で反応した。

キョウさんの双子の妹、2年生のモリグチメイ守口鳴さんだ。

そう言い終えた後、メイさんが一瞬僕を睨んだ……ような気がした。

メイさんは人見知りする性質なのか、あるいは嫌われているのか、僕に対して何だか冷たい。

「じゃあいつも通り、分ける作業から始めましょうか」

それを敏感に感じ取った……わけではないだろう。

ほぼ確実に単なる偶然で、僕の隣に座っていた少女が口を開いてメイさんの険悪そうな雰囲気弾き飛ばす。

綺麗で長い黒髪が特徴的な眼鏡っ子、上品で朗らかな雰囲気を持つ桜ノ宮静音だ。サクラノミヤシズネ

シズネは言いながら、既にいくつかの手紙に手を伸ばしていた。手紙は各コーナーごとに形式が違って別々に書くようになっていたため、コーナー別で分ける必要があるのだ。

目安箱の前には投稿用の用紙が置いてあり、四つ折にするとどのコーナー宛かを書く欄のみが見えるようになるという優れものだったりする……のだが、その機能に気付いていないのか変な折り方を

して入れる人が多いため、結局は開いてみないと宛先がわからないというやや残念なことになっているのだった。

まあ元々、50通前後を6人がかり。たいした手間でもないのだが。

実際、分け切るまで5分もかかっていない。

「うーん、私ら宛が14通でヒロコら宛が16通、でメイちゃん宛が24通か。やっぱり人気だね、うろおぼ演奏」

そして仕分けた手紙を見て、姉さんが感想を漏らす。

「まあメイちゃんら巧いしね。とりあえず、手紙は各きようだい持帰りでもいいね？」

そのつぶやきに、ヒロコさんがフォローなのかよくわからないフオーをしつつ、質問を返す。

「あ、うん、かまわないよ。じゃ後は各きようだい毎に、ってことで」

姉さんの声に、全員が返事をする。

僕ら放送部はちょうど家族別で三つに分けたりも出来るため、こういったことが出来るのだ。

というか、今年はそれ前提で担当コーナーが決まったらしい。

「さて、じゃ本題に入ろっか」

全員が手紙を仕舞ったのを確認してから、姉さんが再び言った。

そう、僕ら放送部の活動は、毎週火曜と木曜にやっているお昼の放送だけではないのだ。

姉さん曰く、僕らの通っている阿鳥学園ことアト学はイベントが多い。

特に文化祭が顕著で、なんと7月中旬と2月上旬の2回もあるのだ。

そして僕ら放送部はその2回の文化祭で、前編と後編に分けて1回ずつ放送劇をやるのが伝統になっている。

しかも、脚本までも部員たちで考えるところまでが伝統なのだ。

「ま、今年はまだ何も決まっていなかったけどね」

しれつと姉さんが言い放った。

おい。

「大丈夫なの？ ヒロコさん、去年はこの時期、どの辺りまで決ま
ってたんですか？」

不安になったので、僕はとりあえず姉さんと同じ三年生に訊ねる。
「そだな、去年は……マリナさんがテーマだけ決めてて、あらずじ
をみんなで考えて……コンセプトが決まったのが6月の頭くらいだ
ったかな。だからこの時期だと、テーマくらいは決まってると思う。
あ、マリナさんってのは去年の部長ね」

「あー、マリナさん懐かしいな」

姉さんが反応した。

けっこう嬉しそうだ。

姉さんのみが高校にいた頃の話は結構右から左だったため、あま
り覚えていない。

「そうですね。結構綺麗な方でしたし……って痛いな、何だよメイ」
同じくキョウさんも懐かしがるが、なぜかメイさんに足を踏まれ
ていた。

「ふん、だ」

本人はそっぽを向いている。

「なんなんだよ……」

よくわからない、といった感じで不満そうにつぶやく。

もしかしてメイさん、『マリナさん』が嫌いだったんだろうか。
「まあ去年はそんな感じでマリナさんが一人で決めてたんだけど。
今年はみんなであらずじ考えて、アタシが脚本書こうと思ってる。
というわけで大雑把でもいいから決めていこうか。マドカ、何かあ
る？」

守口兄妹が険悪になるのを避けるためか、すぐにヒロコさんが話
題を振った。

「んー、童話のたぐいのアレンジ、とかの方がわかりやすいと思う
んだけど。去年もそうだったしね」

姉さんが答える。

「ああ……そうだね、去年はシンデレラだったし。じゃ今年はラプンツェル？」

「どう派生したらそうなるのよ……却下。もうちょつと有名な作品の方がいいと思う」

ヒロコさんの第一案はあっさり姉さんに却下される。

ってかラプンツェルってどんな話だっけ……。

「じゃあ白雪姫とかどうですか」

それを聞いて、キヨウさんが意見を出す。

「やるとしたら魔女役はヒロコだね」

姉さんがにやー、と意地悪そうな笑みを浮かべて感想を言った。

「えー、だったらアタシよりむしろメイちゃんの方が……ごめん」
それにヒロコさんが反論するが、メイさんに睨まれて黙った。

……ヒロコさんすら黙らせる、メイさんの眼力半端じゃねえ。

「おやゆび姫やろうよ。もちろん主役は姉さんで」
便乗して僕も意見を出す。

「カーズーマー……何が言いたいの」

姉さんに睨まれた。

でも気にしない。

「おやゆび姫ってどんな話でしたっけ」

どうやら知らないらしく、シズネが訊ねてくる。

「んー、そーいちゃ私もちゃんとはおぼえてないなあ。主人公がちっちゃいってのはわかるけど……って、誰がちびだゴルァ！」

姉さんが一人で騒いでいた。いつでも楽しそうにしているなあ。

そんなことを考えながら、僕は答える。

「んー、大雑把にいうとチューリップから生まれた女の子が、いろんな動物に誘拐されるんだけど、最後は花の王子さまと幸せに暮らす、って話」

「ホントに大雑把ね……あとそれも結構マイナーじゃない？」

僕が説明を終えると、メイさんが口を挟んだ。

「ねえお姉ちゃん。配役って私たちだけだっけ？」

そしてあらすじの感想もメイさんの意見もスルーしてシズネが口を開く。

「前言わなかったっけ……アタシらのみでやるのが最善だけど、去年は脚本的に人数が足りなかったから、演劇部に協力してもらったよ」

それにヒロコさんが答えた。

「確か去年の部長が演劇部の部長と仲良かったんでしたっけ」

「その通り。よく知ってたね、カズマ」

「姉さんに聞かされた気がするので」

とりあえず誇らしげに答える僕。

しかし実際は、それ以上詳しくは知らなかったりする。というか覚えていないのだ。

「なるほど」

「ヒロコさんとは話さなかったんですか？」

なんとなく気になって訊ねてみる。

というか、桜ノ宮姉妹の日常会話が気になっていた。

品の良さで言えば対極というか両極な2人だし。

「ああ、まあシズネは雑談として話すとすぐ忘れるから」

「えー、そんなことないよお姉ちゃん」

ヒロコさんの発言に、シズネが抗議する。

「じゃあ昨日の晩御飯、覚えてる？」

「もちろん……」

ヒロコさんが試すように、シズネに質問する。

シズネは少し考える素振りをしてから、20秒ほど考え込んだ後。

「えーっと、何の話だっけ」

笑顔でそんな答えを出していた。

なんていうか色々大丈夫か、シズネ……。

結局。

次の定例部会、つまり来週の月曜までに、各自で元にしたい話を探してくる、とだけ決めて今日は解散になった。

「よしカズマ、本屋よって帰ろうか」

「そだね。姉さんは絵本を探すんだよね」

「だーから、あんたは姉さんに対して何が言いたいわけえ？」

おちよくるように言つと、姉さんが怒りのオーラを発しながら僕を睨む。

「お、さすが門真姉弟。熱心だねえ。アタシらはどうする？」

そんな僕らのやり取りを聞いて、ヒロコさんはシズネに訊ねる。

「今日はいんじゃないかなあ。わたしは明後日に集めてる小説の新刊であるから、そのときに探すつもりなんだけど」

「あー、そういやアタシも明後日に集めてるやつ出るわ。そだなあ、今日はまっすぐ帰ろっか」

「うん。じゃあ皆さん、また明日です」

「おつかれー」

そう言い残してから、桜ノ宮姉妹は去っていった。

……ヒロコさんとシズネで、『集めている小説』ときいて連想されるジャンルが違うのはなぜなんだろう。

「おつかれー。えっと、守口兄妹はどうするー？」

付いてくる？ というニュアンスをこめて姉さんは尋ねていた。

「そうですね……」

キヨウさんはそう呟きながら、考えるように腕を組もうとした。

「いえ、メイたちは帰って明日の曲練習します」

しかしその腕は組みきる前にメイさんに絡み付かれ、片方だけが所在無げに浮くことになってしまった。

明日の曲、とはうるおば演奏用の曲のことだろう。

「メイ、別にそこまで急ぐ必要はないんじゃないか？」

自分が考えている間にさっさと答えを出されてしまったのが不服

なのか、キヨウさんはメイさんに言う。

「う……だ、だってまだ曲決まってるじゃないじゃん」

「いつもどおり、既に知ってる曲から選ぶんだしそんな時間いらないだろう」

「いるよ、えーと……ほら、長い曲とかあったりするし」

「そんな長いのは、逆に使えないだろ」

ああ、なんかケンカが始まっちゃった。

「ほーら、2人ともそこまで。まったくもう、しょうがないなあ」
姉さんが仲裁するため、2人の間に割って入る。

大人っぽいヒロコさんがやったら貫禄あったんだろうけど、姉さんがやると背伸びしているようでやっぱりどこか微笑ましかった。

「部長、じゃまです」

そしてあっさりとメイさんに押しのけられていた。

「うにゅ」

……いつも思っけど、姉さんってあんまり部長としての威厳ないよなあ。

なんで部長やってるんだろう。

「しょうがない。行こう、姉さん」

やむをえず、2人をおいて先に行く。

「むー……2人とも、戸締りお願いね」

不満そうに姉さんもそう言い残し、僕に続く。

部室の鍵は職員室においてあるものと部長である姉さんが持っているものの計2つだ。

そして今日は最初に来ていた守口兄妹が職員室から持ってきた鍵があるので、姉さんが先に帰っても施錠は行える。

というかぶっちゃけ、部室内に盗られて困るものというのはほとんどないため、施錠自体気分の問題だったりもするのだが。

そして。学校から歩いて5分、家からなら歩いて10分程度の位

置に、本屋は存在する。

店の名前は……正直覚えていない。

学校周辺どころか家の近くに、本屋はここしかないからだ。

そのため、僕や姉さんみたいにこの辺に住んでいる人間にとって
は本屋〃ここ、という認識が既に出来上がっている。

というか本屋、で通じるので、正式な店名を覚える必要性がま
たく無いのだ。

またもう少し正確に言うと、本屋自体は学校付近のショッピング
モールの中にある。

横幅は2店舗分のスペース、さらにこのショッピングモールで唯
一の3階建てと、ショッピングモール内でも断トツの広さだ。

品揃えも相応に整っており、他の本屋を探す必要が無いことも本
屋〃ここ、という認識を強めていた。

「私は1階で探すけど。カズマはどうする？」

「僕は上から見て回るよ」

姉さんは放送劇の原題を探すのに専念するようだ。

僕はいつもどおり、マイペースに見て回る気満々である。

自分で言うのもなんだが、僕はけっこう読書家だ。

読む本自体は特にこだわりはないのだが、とにかくカバンに何冊
が入ってないと落ち着かない、そんな性質である。

それを姉さんに言ったら、「どこの活字中毒者よ」と呆れられた
けど。

まあ、そういうわけで。

当然、ここにもしょっちゅう来ているため、ここを効率良く回る
ための道順みたいなのは既に自分の中で決まっていた。

具体的には最初に最上階へ行き、上から順番に見ていくのが僕の
スタイルだ。

3階は料理本やビジネス向けのものといった、実用書のたぐいが
多い。

また成人向けの雑誌等も置かれており、色んな意味で大人向けの

コーナーになっている。

成人向けの本はそろそろ隠す場所がなくなってきたからスルーして、実用書の新刊を中心に、タイトル等から面白そうなのを探した。とりあえず『これで終わり……、では終わらない』というハードカバーの本が気になったので、手に取ってみる。

ビニールでぴっちりと封をされており、立ち読みが出来なかった。しかも値段は2000円と地味に高い。

なんだか気になる。

気になるのだが……見なかったことにした。

やっぱり高校生に2000円は高い。

次に手に取ったのは文庫サイズの本で、『人の心をつかむ人身掌握術21』。

普通に立ち読みできる状態だったので、パラパラと最初の方だけ読んでみる。

似たようなのを前に読んだ気がする。

今日は真新しいものを探したい気分だったので、深く読まずに本棚に戻した。

そんな感じで30分ほど見回っていたが、姉さんを待たせているかもしれないことを思い出して2階に降りる。

2階は漫画やラノベといった、若い世代向けの本が多い。

集めているラノベや漫画の新刊はまだ出ていないし、あんまり長居しても姉さんが怒るだけなので素直に1階に降りることにした。

1階は週刊誌や月刊誌、子供向けの絵本や参考書、文房具が置いてある。

階段を降りながら、既に1冊の絵本を熱心そうに読んでいる姉さんを見つけていたのでそのまま駆け寄った。

見ているのはきつと、原題用の作品だろう。

集中しているのか僕に気付いていないみたいなので、そのままそっと観察する。

読んでいた本は……『クトゥルフ神話』だった。

「何をやる気なんだよ！」

「ひゃあ!？」

黙って見守るつもりだったが、思わず突っ込んでしまった。

姉さんは驚いたようで、一瞬本を落としかけていたが、ぎりぎりのところでキャッチしている。

なんだかんだで反射神経はいいようだ。

「もう、カズマあ！いきなり声かけたらびっくりするでしょ！」

「ごめんって。でも姉さん、さすがにクトウルフ神話は無理じゃないかな」

謝りつつ駄目押し。

クトウルフって人ですらないし。

そもそも演じれるものなんだろうか……。

「私も流石にこれをやるうっていう気はないよ。ただちょっと、最近見たアニメでチラツと出てたから気になって」

僕の指摘に、呆れたような照れたような仕草で姉さんは答える。

顔を少し赤くして、もじもじしながら恥らう様は少し可愛いと思っ

でも発言が内容が残念すぎる上に、なんだかんだ言っても血の繋がった実の姉である。

あまり気にせず、僕はさっさと本題を訊ねることにした。

「それで、姉さんの候補は決まったの？」

「まあ一応ね。これとかどうかな」

そう言って姉さんが掲げたのは、『アーサー王物語』だった。

「……けっこう長くない？」

放送劇は前編後編あわせて2時間程度、と決まっている。

2時間でやるのは少々無理があるのではないだろうか。

「愛があればいけるよ！」

目を輝かせていう姉さん。

多分これを挙げてるのもアニメの影響なんだろう。

「却下」

「えー……面白いのに。じゃあこれは？」

次に取り出したのは……

「都市……伝説？」

最近の都市伝説について——そんなタイトルの本だった。

「うん、色んなのが載ってあるし、どれか掘り下げたら面白いんじゃないかなって」

姉さんにしてはまともな案だ。

都市伝説はメジャーなものからマイナーなものまで色々ある。

巧くやればいい作品ができそうな気がした。

「なるほど……いいね。僕も手伝うよ」

「うん、お願い。じゃあ、ちよつと買ってくるね」

「わかった、外で待つてる」

僕の返事に頷き、姉さんは本を両手で抱えてレジへと向うのだった。

……実は僕個人で候補を探すの、声を掛けるまで忘れていたので助かったというのは内緒である。

便乗できてよかった。

——続く。

5月下旬、水曜日、木曜日（前書き）

マドカが買った本の内容は？

そしてキョウとメイの日常が垣間見れる第4話。

お楽しみください。

5月下旬、水曜日、木曜日

姉さんが本屋で都市伝説に関する本を見つけてきた日、夜。

夕飯を終え、さらに風呂から上がって、ベッドに寝転がりながら本を読んでいると。

ドンドン、という荒っぽいノックの音が聴こえてきた。

「カズマ、いい？」

そして僕が返事をするより早く、ドアが開けられる。

年頃の男の子の部屋に、何の遠慮もなく立ち入ってくるのは……言うまでも無く、姉さんだ。

僕の後に入ったのだらう、姉さんは風呂上がりなのが一目でわかる上気した顔で、お気に入りらしい三毛猫模様のパジャマ姿で僕の部屋にやってきた。

うちで飼っているトラネコ、ファングも一緒だ。

ファングは姉さんがドアを開けたときに、するりと僕の部屋に入ってきた。

「ドアを開けるのは返事してからにしてよ……」

とりあえず文句は言っておく。

まあ正直、今夜姉さんが部屋に来ることは予想していたので特に問題は無かったのだが。

……具体的に言つと、見られたらアレな本とかDVDはちゃんと隠してある、ということだ。

「まあまあ。じゃ早速、付き合つて」

そんな僕の考えを推測するそぶりも見せずに、姉さんは嬉しそうに本屋で買っていた都市伝説の本を僕に見せつけた。

同時にファングが「なー」と鳴く。

普通猫の鳴き声って「にゃー」辺りだと思うのだが、うちのファングの鳴き声はどう聴いても「なー」としか聞こえない。

いや、別にどうでもいいことなのだが。

「いいよ」

どうでもいいことに思考を巡らせつつ、僕は姉さんの誘いを快諾した。

というか、元々そのつもりだったからである。

僕の答えで姉さんは機嫌を良くしたのか、嬉しそうに僕のベッドのふちに座ると、ぼんぼん、と自分が座っているすぐ横を叩いた。隣に座れ、という合図だ。

僕が動こうとすると、先にフアングがその合図に反応して、姉さんが指示した位置でごろんと丸くなった。

姉さんはそれを見て少し微笑み、フアングをひょいと持ち上げて膝の上に乗せて、僕の方を見る。

早く来なさい、と目で訴えかけていた。

「はいはい」

膝の上で不満げになーなー鳴いているフアングを無視しつつ、僕も姉さんに応える。

腰掛けたのを見計らってから、姉さんが僕にもたれかかってきた。姉さんが小柄なだけあって重くはないが、ややうっとおしい。

そろそろ暖かいを通り越して暑い季節になってきたし。

しかし、昔この状態で姉さんを離そうとして軽く弾いたら、そのまま戻る、弾く↓戻る、また弾く↓また戻ると無限ループになったことがあるので、それ以来大人しく肩を貸すことにしている。

ベッドは壁際に置いてあるのだから、もたれたいなら奥に座ればいいのに……。

「ふふん」

僕に抵抗する気がないのを察したのか、姉さんは上機嫌なまま本を開いた。

本はB5サイズとあまり大きくないため、ある程度密着しないと読めない。

「……………」

「……………」

しばらくの間、無言になってページをめくり続けた。

内容的には首なしライダーや人の缶詰といった、ホラー要素の強いものが多かったように思う。

しかもわざわざ不気味なイラストが付いているせいで色々想像させられてしまい、結構怖かった。

そしてなんとなく。

お互い最初から無言だったせいかな、先に口を開いたら負け、みたいな良く分からない雰囲気になってしまっただけ。

結局2人とも、最後まで一言も喋らないままで、本を読み終えたのだった。

「……………」

読み終わっても、姉さんはまだ口を開こうとする気配がない。

僕はもういいかと思って姉さんに言葉を投げ掛けることにした。

「どうしたの？」

「いや、んー……えっと……」

とりあえず声をかけても、姉さんはなんと言ったらいいいのかわからない、そんな感じの反応をする。

「どれかベースにしたい話はあった？」

待っていても進展しなさそうだったので、もう少し具体的に話題を振る。

「……………」

だが返答は無い。

改めて姉さんの顔を見ると……その顔色は、やや青ざめているように見えた。

……………もしかして。

「姉さん……もしかして、怖かった？」

からかうつもりは無く、むしろ心配してそう訊ねたのだが。

「こ、怖くなんかないよ！　そういうカズマだって怖いんじゃないの！？」

キレられた。

このバカ姉……せつかく人が、親切で言っただけで、
「そんなわけないだろ！　こんな子ども騙しで怖がるの、姉さんくらいだよ！」

「誰が子どもよ！」

そう言いながら、手元にあった僕の枕を投げつけてくる姉さん。

枕は僕の顔に当たり、一瞬目の前が真っ暗になる。

そして枕が落ち、再び視界が広がった頃には、部屋には姉さんの姿はなかった。

直前に聴こえた足音から察するに、自分の部屋に戻ったのだろう。

——もういい、知るもんか。

そう思いながら、僕は部屋の電気を消し、不貞寝した。

朝。

日の光を顔に感じて意識が戻る。

あのまま眠ってしまったため、雨戸が開きっぱなしになっていたようだ。

太陽光は僕の顔面に直撃していて、このままでは流石に寝られない。

というわけで、僕は寝返りを打った。

すると、何か柔らかくて暖かいものに触れる。

目を閉じたまま、それが何かを探るため手に意識を集中した。

そこにあっただのは、ふさふさした体毛に覆われた、柔らかい感触だった。

……どうやら知らない間に、ファンゲが僕のベッドにもぐりこんでいたらしい。

そういえば昨日、姉さんが部屋から飛び出した時にはまだ部屋にいた気がする。

ということは、閉じ込めてしまっていたのかな……。

ぐだぐだと、寝起きのあまり回っていない頭で考えていると、「すう……………」と寝息が聞こえてきた。

明らかに人のものだ。

まさかと思いながらも、僕は目を開ける。

目の前に、姉さんの顔のアップがあつた。

「うわあ!？」

慌てて飛び起き、勢いに任せて掛け布団を剥ぎ取る。

そこには、可愛い三毛猫模様のパジャマのまま、猫のように丸くなって眠る姉さんの姿があつた。

「もう……………なに……………?」

姉さんは、寝ぼけた声で返事をしていた。

「なに? じゃないよ! なんてここで寝てるのさ!」

昨日の今日でカツとなつた僕は、迷わず姉さんを怒鳴りつけた。

「……………」

姉さんは気まずそうに、顔を赤らめてそっぽを向いた。

「……………」

僕も黙って、姉さんの返答を待つ。

しばしの沈黙の後、姉さんがとつた行動は…………

「……………あ、あれは人を怖がらせるための本なんだから! これは自然な反応なの!」

逆ギレだった。

しかし内心恥ずかしいのだろう、顔が真っ赤だ。

「あー、はいはい……………」

それを見たら、なんだか怒るのもバカらしくなって。

僕もそこから、あえて追求はせずに。

姉さんがまだ言い訳がましく何か言っていたが、それも適当に聞き流して。

いつものように、二人で学校へと向かうのだった。

それから。

昼休みの放送はいつも通り（お察してください）にこなした木曜日の放課後。

担任がいつも通り帰りのHRを適当に終わらせて去っていったのとほぼ同時に、キョウさんからメールが来た。

『今から一緒に、ゲーセンいかないか？』

キョウさんはゲーセンに行くのが趣味らしく（やっているのはだいたい音ゲー）、最近によく僕を誘ってくれる。

ケータイのカレンダーを確認。

今日、この後は特に用事もない。

……よし、前フルボッコにされた格ゲーの、リベンジマッチを挑むとしよう。

そんな想いを胸に秘めて、僕はすぐに『行きます！』と返信した。

「よし、じゃあ早速行こうか」

「うわあ！？」

後ろから、いきなり声が聞こえてきた。

振り向くとそこには、機嫌良さそうに微笑んでいるキョウさんの姿が。

「よう、カズマ。驚いたか？」

「驚きますよ……ってか何で返信とほぼ同時に声を掛けてくるんですか」

とりあえずツツコンでおく。

「ああ、実は教室の影でずつと張ってたんでな。行こうぜ」

言いながら、キョウさんはどこかそわそわしている。

まるで、何かに追われているような……。

あ、もしかして。

「そういえばキョウさん……」

メイさんは一緒じゃないんですか？ と訊ねようとした、その時。
「準備できたな？ 行くぞ！」

僕の言葉はあっさりと遮られ……

「って、うわあ!？」

そのまま、強引にゲーセンへ連れて行かれたのだった。

学校から歩いてなら10分くらいのショッピングモールに、ゲーセンもある。

というか学校周辺のゲーセンもそこくらいしか無いため、僕ら阿鳥学園の生徒が『ゲーセン』と言ったら、だいたいここを指す(キヨウさん談)。

ちなみにこのゲーセン、お世辞にも都会とは言いがたい町の雰囲気と違ってかなりゲームの揃えがいい。

首都圏や都市部にしか置いてなさそうなネット通信前提の筐体も、当然のように置いてあるのだ。

「けっこう空いてるみたいですね」

しかし、その割にはあんまり客は入っていなかった。

「この時間は穴場なんだよ。HR終わってすぐにダッシュで来たなら、な。混むのはこれからだ」

「なるほど……」

さすがはセンパイ、という感じだった。

キヨウさんに連れてこられるまでゲーセンに通う習慣が無かった僕には、そこら辺の勝手はさっぱりなのだ。

「じゃあキヨウさん、さっそく『ウエマ』やりましょうよ。この前のリベンジです」

「いいぜ。手加減はしないからな？」

僕がそう言うと、キヨウさんは勝気な笑みを浮かべ返していた。

ウエマ……正式名称『ウエボンマスターズ』は最近出たばかりの対戦格闘ゲームである。

原作はラノベらしいのだが、微妙にレアなのか見つけれられていない。

一回読んでみたいんだけどなあ……。

とまあ、それはさておき。

ゲームの特徴としては、開始時にキャラクターだけでなく、そのキャラクターが使う武器も選べるという点がまずは挙げられる。

プレイヤーキャラは6人と一般的な格闘ゲームにしては少なめなのだが、武器も6種類あつて、キャラクター選択時にそれも別で選ぶ事になるため、使えるキャラクターのパターンは実質、6×6で36通りある。

僕が愛用しているのは加奈^{かな}というキャラクターで、能力としてはパワーは無いけど小柄でスピーディ、トリッキーな動きで相手を翻弄するタイプ。

それに6種類ある武器の中で最も攻撃力が高いバトルアックスを持たせたタイプが、僕の主力になっている。

対するキヨウさんは、高いパワーとスピードで相手を叩きつぶす、本編の主人公^{らしい}、太一^{たいち}を使ってくる。

キヨウさんは原作を知っているらしく、装備も原作に従って双剣を選んでいる、とのことだった。

「さあ行くぜ、カズマ！」

「はい、キヨウさん！」

キヨウさんの合図で、僕とキヨウさんの死闘が始まった。

先に仕掛けてきたのは、キヨウさんだった。

ダッシュで一気に接近、斬りかかってくる。

僕は飛んでそれを回避、後ろに回り込んでバトルアックスで襲いかかった。

しかしそれは読まれていたらしく、あっさり中段ガードで止められてしまう。

だが、こつちもそこまでは想定済みだった。

すぐにしゃがんで、下段にローキックを叩きこむ。

加奈のスピードは全キャラ中でも最速だ。

だからこれは——読めていても、防ぐことが出来ない！

バシッ、というサウンドエフェクトと共に、相手にダメージが入った！

……最大HPの5%くらい。

やっぱ加奈は、武器で攻撃しないとダメージが低いなあ……。

そんなことを思っていると。

「そう来るのを、待っていた」

キヨウさんが、どこか嬉しそうにそう呟く。

「しまった……」

やばい———そう思った時には、もう遅い。

キヨウさんは双剣の特性を最大限に活かして、攻撃を仕掛けてきた。

双剣の特性。

それは一撃の威力の低さを引き換えにした、全6種類の武器の中でも最高クラスの……連続攻撃の速さに他ならない。

ゼロ距離での、連続攻撃。

しかもキヨウさんが使っている太一は、元々のパワーが高いため、双剣の攻撃力の無さは充分カバーできてしまうのだ。

その連続攻撃だけで、一気にHPの4分の3くらいを持っていかれてしまった。

やむを得ず、後ろに飛んで距離を取る。

まずい。

これでかなり不利になってしまった。

でも……高いスピードによる回避性能の高さが、僕の持ちキャラ、加奈の魅力だ。

HPが0になるまでは……まだ、勝負は分からない。

ここから逆転勝ちすることだって、きつと出来る！

僕はそう信じて、スティックを握り直すのだった。

そして。

「……まあ、そうだよな」
結局。

あの後には、一撃も与えることなくあっさりと負けてしまった。そもそも序盤に4分の3も食らってしまった時点で、『回避性能の高さ』に信憑性なんてねーよ畜生。

「まだまだだな、カズマ」

嬉しそうに、キョウさんは勝ち誇った様子でそう言った。

「つ、次こそは勝ちます……」

完敗してしまった僕に言えるのは、それだけだった。

「まあ、そうしよげるなつて。次ギタマやるから、ついてきてくれ」

「あ、はい」

ギタマ……ギターマイスターは、キョウさんお気に入りの音ゲーである。

ギター型のコントローラーを使って、曲に合わせてボタンを押していく、いわゆるリズムゲーという奴だ。

いつも放送室で散々、アコースティックギターを掻き鳴らしているはずなのに……まだ鳴らし足りないんだろうか。

「わかりました」

そんなことを密かに思いつつ、僕は素直についていった。

途中、UFOキャッチャーが目に入る。

中身は猫を丸っこくデフォルメした感じのぬいぐるみだった。

あれ取って帰ったら、姉さんが喜びそうだなあ……。

などと思っていると、ブーン、という振動音がかすかに聴こえてくる。

ポケットに上から手を当てて見るが、僕のケータイが震えているわけでは無さそうだった。

となると……

「キョウさん、ケータイ鳴ってません？」

厳密にはバイブレーションなので、『鳴っている』はおかしい気がするのだけど。

……日本語って難しいなあ。

「ん？ ああ、みたいだな」

と言いながらも、キヨウさんはポケットからケータイを取り出そうとする素振りすら見せなかった。

「……良いんですか？」

念のため、聞いておくことに。

「ああ、大丈夫だ。メイからだしな」

「メイさんから？」

って、見なくても分かるの？

バイブレーションのパターンとかで区別しているんだろうか。

「ああ。どうせ『今どこにいるの』っていう電話だろう。あいつもいい加減、兄離れするべきだと思うんだけどな……」

「兄離れって……」

キヨウさんの何気ない呟きを、僕は思わず拾ってしまっていた。

「……あいつ、今でも俺にべったりだからなあ。いい加減兄離れしておかないと、彼氏とか出来ないんじゃないか」

それに気付いたのか、キヨウさんは続きを話してくれる。

「言われてみれば……確かにメイさん、うちの姉さんよりべったりな気がしますしね」

「だろ？」

僕が同意すると、キヨウさんはようやく理解者が出てきた、とでも言いたげな感じで言葉を続けた。

「いつも俺に抱きついて甘えてくるし」

「あー……」

うちの姉さんも、中学生くらいまではそんな感じだったなあ。

……いや、今もか？

「それに俺の姿が見えない時は、どこで何をしているかを聞いてくるし」

「……うちはそれは無いですね」

ってかそれ、兄妹としてはおかしくないかな？

「しかも抱きついてくるの、学校とかでもお構いなしだぜ？ 恥ずかしいからやめろ、っていつも言ってるんだけどなあ」

「うちの姉さんでも、さすがに人前ではやらないなあ……」

「極めつけに、この間は俺が風呂入っている時に一緒に入ろうとしてきたんだぜ？ もう子どもじゃないんだから、いい加減恥じらいとかを覚えてほしいんだがな……」

呆れたように、キョウさんはそう言った。

「うちの姉さんはむしろ、入浴中に風呂場に近づいただけで怒りますね……」

このヘンタイツ！ って。

色気という単語からは程遠い体つきをしているくせに……。

しかも血の繋がった姉なんだよ？

あれに欲情できたら、確かにヘンタイだとは思っけど。

……………ん？

そこまで内心で悪態をついてから、頭に何かが引つかかった。

というか、あることに 勘付いてしまった。

「？ どうした、カズマ？」

それを敏感に感じ取ってくれたのか、キョウさんが声をかけてくれる。

「いや…… ちょっと思っただんですけど」

もしかして、メイさんって…… 僕が率直に、思っただ事を言おうとしたその時。

「ああああああああああっ！ キョウツ！ やっぱりここだったー！」

ハキハキしていて通りの良い…… 通りが良すぎて、比喩表現でなく物理的に耳が痛くなるほどの騒音が聞こえてきた。

メイさん、やっぱり声量凄い。

「め、メイ？ どうしてここが？」

突然現れたメイさんを見て、キョウさんは困惑した様子で訊ねていた。

「なんで電話出てくれないのよ！」

対するメイさんは怒り心頭、といった感じた。

つてかもう、会話が噛み合っていない！？

「しかもメイを差し置いて、カズマなんかと二人きりで出掛けて！」

そのままメイさんは、キョウさんに対してまくしたてる。

つてか『なんか』つてなんだ、『なんか』つて。

「カズマは関係ないだろ！」

キョウさんも言い返す。

つてか何だろう、これ。

兄妹ゲンカつて言うより……

「無くない！　メイより、カズマの方がいいっていうの！？」

もはや、痴話喧嘩だ。

もしかしてメイさんつて、キョウさんのことが……。

そんな不穏なことを思いながら、僕は2人のケンカを、固唾を呑んで見守るのであった。

—— 続く。

6月上旬、月曜日（前書き）

ついに、今年の放送劇の原題を決める日がやってきた。
みんなが持ってきた案とは。

そして、最終的にカズマたちは何をすることになるのか？

第5話。

お楽しみください。

6月上旬、月曜日

放送部の部室内には今、放送部のメンバー6人、つまり全員が集まっていた。

今日もとても大きな議題は、今年の放送劇の原題は決めることだ。僕ら門真姉弟の案は土日に姉さんと話し合ったので、既に決まっている。

思いつく限りで最善のものを選んできたので、正直、自信があった。

後は他の人たちがどんなのを考えてきているかだけだ……。

僕が黙考していると、姉さんが「それじゃあ始めるよ」と全員に合図をした。

「えーっと、兄弟姉妹で一つ考えてきたところってある？」

開始と同時に、ヒロコさんが全員に向かってそう訊ねる。

「うちはそうです」

まさに僕らのことだったので、迷わず肯定する。

「俺ンともそうです」

キョウさんも続いた。

これでウチと守口兄妹は確定だ。

「ヒロコさんのところは？」ヒロコさんの聞き方でなんとなく予測は付くが、一応訊ねる。

「アタシらもそうだから……結局、案は3つしか無いのか」

ヒロコさんはだいたい、僕が想像した通りの答えを返した。

「みたい。まー、部のメンバーが3組の兄弟姉妹だから、そうなくても仕方ないかなあ……」

ヒロコさんの言葉に、姉さんが苦笑いで同意する。

個人で案を用意している人が1人もいないので、誰もそのことに

文句を言えなかった。

「ま、とりあえずはあるものから聞いていけば最終的には何か浮かぶでしょ。各家ごとに発表しよう。というわけで……シズネ」

先手必勝とでも言いたそうに、ヒロコさんは先陣を切ってシズネを促す。

「はい、お姉ちゃん。私たちで考えてきたのは、『不思議の国のアリス』です」

促されるままに、シズネは堂々と作品名を挙げた。

「あー、いいね。有名作品だし、大きく外れることが無さそう」

桜ノ宮姉妹から出てきたのは、有名な文学作品だった。

去年はシンデレラであったことを考えると充分に順当なのだが……桜ノ宮姉妹の言動は突飛なイメージがあるせいか、少し不思議だった。

正直もつと、斜め上のところできると思っていたのだが。

「んー……思ったより無難な作品で来たね？」

姉さんも僕と同じことを思ったのか、率直にそれを口にする。

「あー、まあなんていうか。シズネ相手だと、アタシがツツコミに回らざるをえなくなつてさ」

ヒロコさんは、一度軽くため息を吐いてからくたびれたような表情と声で語り始めた。

土曜日夜の夕食時、桜ノ宮邸にて。

「ねーシズネ。結局今年の放送劇、何が良いと思う？」

シチューを口に運びながら、ヒロコはシズネに訊ねる。

「んー、クトゥルフ神話とかどうかなあ。最近、それにちなんだアニメやっていたし」

「それ、どう再現するんだよ」

なぜか自信満々に語るシズネに、ヒロコが全力でツツコミを入れる。

クトゥルフ神話なんて詳しく知らないが、確か人外の物語だったはずだ。

「……じゃあ、アーサー王物語は？」

「長すぎだつて。上映時間は前半・後半あわせて1時間しかないからね？」

さつきよりはまともだが、それでも上映時間を考えるとそこまで壮大な物語をやるのは難しい。

去年・一昨年から脚本自体を手伝っていたため、どれくらいだと『長すぎ』なのかの目星はもうヒロコにはついている。

「んー……じゃあ日本の作品で……白雪姫とか？」

「んー、そっちだと短すぎかなあ。前回のシンデレラも、原作だけだと短すぎたから大分肉付けしてたし……原型が分からなくなるくらいに」

去年の超展開が多発した放送劇を思い出し、ヒロコは密かに苦笑いをする。

ガラスの靴がぴったり合う人がシンデレラ以外にも何人が居たので、さらに細かい選定に入る……なんてシーンを考え、台本を書き切った先輩は今でもヒロコにとっては尊敬すべき人だ。

「じゃあ……もうちよつと長い作品の方がいいのかな。水滸伝とか」「『ちよつと』どころじゃなく長い！ しかも何人要るんだよ、それ！」

キャストが108人以上必要な作品なんて、無茶振りもいいところだ。

「じゃあ……三国志？」

「水滸伝と同じ理由で却下！」

……そんなやり取りが夕食を終えてから、丸一日ほど続いて。

最終的には、ヒロコが去年候補として出ていたものの中から、一番無難そうなヤツを選んで強引に終了せざるを得なくなったのであった。

「……なんていうか、お疲れ様です」

ヒロコさんの簡潔な回想を聞いて、メイさんが苦笑いしながら辛うじてそう告げる。

「ええ、大変でしたよ」

なぜかそれにシズネが応えた。

「大変にした張本人がねぎらいの言葉を受け取るなって……」

僕は呟くようにツツコむ。

あと、シズネの無邪気で無意識な無茶振りの前半部分が、姉さんがやりたそうにしていた案と同じなのはどういうことだ。

シズネも姉さんと同じようなアニメを観ているんだろうか。

「ちなみに不思議の国のアリスの場合、アリスは誰で考えてる？」

僕が割とどうでもいいことに思考を廻らす隣で、姉さんはヒロコさんに質問していた。

「ああ、メイにやってもらうつもり。アタシはちょっとアダルティすぎるし、シズネだと緊張感出ないし」

ヒロコさんは最初から想定していたのか、それにすらすらと答える。

「私の場合も、あだるていーすぎるから？」

姉さんが懸命に色っぽい声を出して訊ねる。

かしななというか……中途半端すぎて、かえって微笑ましいものになってしまっていた。

「いや、マド力は幼すぎ」

「……………」

しかもヒロコさんには普通にスルーされ、否定されてしまった。

……哀れだ。

「……なるほどね。えっと、キヨウくんらは？」

やや凹みながら、姉さんは次にキヨウさん達に訊ねる。

「あ、ハイ。俺たちは……メイの強い希望で、ロミオとジュリエットです」

メイさんの強い希望……………

「ということは、配役はキヨウさんがロミオでジュリエットがメイさんですか？」

嫌な予感がした僕は、とりあえずそう訊いた。

「ん？ ああ、よくわかったな」

僕の問いに、キヨウさんは、感心した様子で頷いた。

なぜ分かったんだろうと思っていそうな、不思議そうな顔で。

……いや、メイさんあからさま過ぎでしょう。

なんで『なぜそれを言い当てられたのかが分からない』みたいな顔してるんですか。

そんなキヨウさんの様子に、メイさんもなんと形容しがたい微妙な表情をしていた。

「なるほどねー。じゃあそろそろ私らの番かな」

姉さんが意気揚々と立ち上がる。

姉さんも僕同様に、自信満々だったようだ。

「うちの学校にさ、七不思議ってあったよね。あれを題材に出来ななかった」

姉さんはハキハキと、いつも以上に良く通る声でそう言った。

「ああ、あったね」

姉さんの意見に、ヒロコさんが食いついた。

そう、要は『学園の七不思議』だ。

だいたいこの学校にあるメジャーな話であるため、ある意味身近という点も相俟って面白いのではないか。

それが、以前買った都市伝説の本を眺めていて浮かんだアイデアだった。

「うちの学校、七不思議なんてあったんですか？」

シズネは聞いたことが無かったのか、おおよそ全員に向かってそう訊ねていた。

「ああ、いくつか聞いたことがあるぜ。夜中にブレイクダンスする人体模型とか、真夜中に逆再生されるチャイムとか」

シズネの質問に、キヨウさんが答える。

「メイも知ってるよ。深夜2時、職員室の窓ガラスが全てマジックミラーになるとか真夜中の3時に二宮金次郎の像が薪でジャグリングを始めるとか」

メイさんも続けて話してくれた。

僕は一応、既に姉さんからひと通り聞かされていたので知っていたのだが……なんていうか。

うちの七不思議っていちいち突っ込みどころがあって素直に怖がれないんだよなあ……。

「深夜4時、グラウンドに巨大なダンスホールが浮かび上がって、学校で死んだ生徒や職員のゾンビや亡霊たちがダンスパーティをしている、なんてのもあるよね」

「……いつも思うけど微妙に楽しそうだよなあ」

姉さんがまだ上がってないのを言つと、ヒロコさんがぼそつと突っ込みを入れた。

「あとは……無限階段の計6つで全部でしたよね」

記憶を辿るように、キヨウさんが最後の一つを挙げる。

「そだね。7つ目を知ってしまった人は、怪死してグラウンドのダンスホールに送られるから、知っている人間はいないって言われている」

姉さんがそう言つて、七不思議の概要を締めくくる。

「……怖いような、シュールすぎてむしろ笑えるような」

ヒロコさんが再びツツコミを呟いた。

「無限階段ってなんですか？」

七不思議についてまったく聞いたことのないシズネが、唯一名前だけではいまいち概要のつかめない『無限階段』について確認してくる。

「よくぞ聞いてくれました！」

その質問に、姉さんが嬉しそうに反応する。

まあ当然といえば当然だろう。

何しろ。

「何を隠そう、私たちが本筋にしようとしてるのはこの話なんだよ。なんだかんだで、これが一番深いからね」

……ということだ。

「そうなんですか？」

姉さんの断言に、シズネが不思議そうな反応を示した。

「うん。これだけ変に、ストーリーがしっかりしてるんだよね」

それにヒロコさんが補足する……というか語りだした。

「夜の8時。部活が終わって帰ろうとしたある生徒が、途中で忘れ物に気付いてね。最上階である3階にある教室に取りに行こうとしたんだけど……。ただけ階段を上っても、階段が途切れず、最上階に辿りつかないんだ」

ややおどろおどろしい雰囲気で、ヒロコさんが話を紡いでくれる。普段明るくておおらかなヒロコさんだから、こういうダークな雰囲気を作って話すのは何だか新鮮だった。

「どれだけ階段を歩いても、ずっと踊り場に出ていて一向に上の階にたどり着かない。不安になって今度は下の階に向かって歩いた……. ということかも、ほとんどパニックになって駆け下りてたらしいんだけど……. やっぱりというか、今度は下の階にたどり着けない。ふとどれくらい時間が経ったのか気になって時計を見ると……. デジタル時計は8:08と表示されたまま、止まってたんだ」

「止まってた？」唯一詳細を知らないシズネが、続きを促すように訊ねる。

「うん。デジタル時計にはちゃんと、数字が映ってるんだよ。でも、秒の単位が08のところまで止まってて、ずっと見つめていても動かないのね。それでその子はもうどうしようもないくらいパニックになって……. 腕時計を外して、壁に投げつけたらしいの。そうしたら時計が壊れて、気付くと1階と2階の間の踊り場に立ってたんだって」

「……えーと、なんで？」特に怖がる様子も無く、シズネは淡々と

訊ねていた。

「うーん、算用数字の『8』ってさ、90度傾けると∞（無限大）の記号になるじゃない？ だから、デジタル時計でもっとも多く、そして早く8が並ぶ瞬間である8時8分8秒に、それが起こったんじゃないかって言われてる。時計を壊したら、脱出できたっていうラストだしね。で、マドカ。これに肉付けして、話を作ればいいの？」

シズネに話し終えてから、ヒロコさんは姉さんにそう確認する。

「んー、そのつもりで考えてただけ……改めて聞くと短い気がする、ってきた」

少し考えてから姉さんが答える。

「そうですね……確かに、肉付けするにも短すぎると思います」

キヨウさんが姉さんの懸念に同意した。

長すぎ、短すぎの感覚はさすがに一年生である僕には分からない。シズネも僕と同様らしく、きょんととしていた。

「じゃあ、こういうのはどうですか？ 一組のカップルが学校に迷い込んで、前編と後編でそれぞれ3つずつで6つの不思議を体験する、っての」

僕が戸惑っていると、メイさんがそんなことを言い出した。

「あー、それいいな。それで行こう！」

それにヒロコさんが食いつく。

脚本はヒロコさんがメインで書くことになっているため、最終的な決定権はヒロコさんが持っている。

彼女が『行こう』と言えば、それで決定だ。

「じゃ、決まりだね」

それを察した姉さんが、嬉しそうにそう言った。

「ああ。今年の放送部の演目は、『阿鳥学園七不思議』だ！」

ヒロコさんも、楽しそうに声を張り上げた。

メイさんも満足そうな顔をしているのは……考えないようにしよう。

とりあえず。

今年の放送部の演目は、無事決定したのであった。

そして、その日の帰り道。

「決まって良かったね」

他の4人と下駄箱や校門で別れてから。

僕は姉さんに話しかける。

「そうだね。ちょっと考えてたのとは違うのになったけど」

やや不満そうな内容の台詞を、姉さんは弾んだ声でそう言った。

なんだかんだ言っても、自分の持ってきた案が最終的な内容のベ
ースになったことが嬉しいんだろう。

「にしても、カズマもいいの思い付いたよね。うちの学校に七不思議があつたこと、知らなかったんでしょ？」

上機嫌なまま、姉さんは日曜日辺りの話を引つ張ってくる。

「んー、まあ去年まで行つてた中学にあつたからね。もしかしたら高校にも、って思つたんだよ」

「さすが私の弟！ 姉さん鼻が高いよー」

僕が答えると、姉さんが相変わらず上機嫌にそう言った。

いつもなら「そうだねー、高いねー」って言いながら姉さんの絶対的な小ささを強調してやるのだが、今日は僕も機嫌がいいからやらない。

そのまま、姉さんとまた他愛も無い話を続けていると。

ぶーん、というバイブレーションの音が聞こえた。

ズボンの、ケータイを入れているポケットに触るが、震えている手触りは無い。

となると、僕じゃなくて姉さんか……そう思つたのとほぼ同時に、姉さんがスカートのポケットから携帯を取り出していた。姉さんは「ちよつとごめんね」と言いながら、ケータイを開いた。電話に出る素振りはないため、メールだと分かった。

「？ 誰だろう」ボタンを押してから、姉さんはそんなことを呟く。どうやら登録されてないアドレスからのメールらしい。

「えっと……………」

姉さんはやや怪訝な顔で、ケータイを操作していた。

きつとメールを読んでいるのだろう。

ま、しばらくは黙っておこうか……………なんて、僕が暢気に考えていると。

「え、ええええええええええ！？」

姉さんは、僕の隣で驚きの声を挙げたのであった。

—— 続く。

第06話：6月上旬、火曜日（前書き）

マドカに届いたメールとは？

一通のメールから、カズマたちの日常は動き出す——！

第06話：6月上旬、火曜日

放送劇のテーマが学園の七不思議に決まった翌日の放課後。

僕、こと門真^{かどま}一馬^{かずま}は学校の体育館裏に潜んでいた。

阿鳥学園の体育館裏は、『体育館裏』の一般的なイメージをそのまま再現したような状態になっている。

外からはまるで城壁のような高い壁に覆われているため中の様子が見えず、また体育館自体校内の端っこにあつて学内の人間もあまり目をやる機会が無い場所であるため、人知れず何か……例えば決闘や告白をするには持つて来いの場所なのだ。

そのため、アト学では定番の呼び出しスポットとして使われている。同性から呼び出されたくない場所としてはぶつちぎりでワーストワンなのは言うまでもない。

……まあそれはいいとして。

潜んでいる、という表現で既に察している人もいるかもしれないが、今日ここに呼び出されたのは僕では無い。

僕は一度考え事をやめて、改めてその呼び出された本人の観察に集中した。

視線の先には、ランドセルを背負つていても違和感が無さそうな身長体型それに顔つきをした高校3年生、僕の姉さんである門真^{まどか}円が、どこか落ち着かない様子でそこに立っている。

そう、呼び出されたのは僕の姉さんだった。

姉さんと呼び出した人間と、その目的は。

昨日の放課後、姉さんに届いたメールにすべて書いてあった。

「えええええええ！？ か、カズマ！ これ見て、見て、見て！」

僕との雑談中に携帯に届いたメールを開くと、姉さんは近所迷惑極まりない驚きの声を上げた。

そしてその直後に、今度は興奮した様子で僕にメールを見せ付けてきた。

また厄介事かなあ……などと内心面倒に思いながら、僕はメールを読む。

「えーと、なになに……」門真円様へ。生徒会長の園口高司そのぐちこうしです。貴女にどうしてもお伝えしたいことがあり、突然ではありますがこうして直接、メールを送らせて頂きました。明日の放課後なのですが、体育館裏にお越しいただけないでしょうか。よろしく願います」……」

えっと……つまりということだろう。

1回読んだだけではいまいち事態が飲み込めなかった僕は、何度かそのメールを読み返す。

早い話が、呼び出しメールのようだった。

時間は明日の放課後、場所は同性には呼ばれたくない場所ワーストワンな体育館裏。

そして呼び出し主は、今年度の生徒会長である園口高司。名前から想像する限り、性別は男性で間違い無さそうだが……正直、それ以外は知らない。

ってか、普通生徒会長の顔とか人柄なんて覚えてないって。

「……なるほど、決闘の申し込みか」半分くらい思考を停止した上で、僕は投げやりに呟く。

「なわけないでしょ！」姉さんに全力で突っ込まれた。

「……だよねえ。じゃあやっぱり」

同性には呼ばれたくない場所ワーストワンの体育館裏だが。

逆に異性から呼ばれると、目的はほぼ告白、というのが定説だったりする。

「へー、あの生徒会長が私に、ねえ……」

姉さんは年上の余裕を示すかのように、どこか尊大な言葉を放つ

た。

しかしその顔はだらしくニヤけている。

まことに残念だが、年上の余裕も威厳も何も感じられなかった。

「って姉さん、生徒会長のこと、知っているの？」姉さんの知ってる風な口振りが気になって、僕は思わず食いつく。

「うん、直接話したことは無いんだけど、色々聞いてるよ。ってかカズマ、知らないの？」

「……んー、外見と中身以外なら知ってるかも」

「何を知ってるのよ!？」

なんとなく『知らない』と言いたくなかったのでそう答えたら、姉さんに再び突っ込まれた。

「……名前だけ、かな」

「それ、絶対今メールを見て知ったことだよね……?」

ジト目で姉さんに睨まれ、僕は仕方なく首を縦に振った。

だから普通、1年生が生徒会長のことなんかおぼえてるわけないっば。

「じゃあ、私が知ってる限りで話すけど。今年の生徒会長……あ、うちの生徒会長って、基本的には3月に1、2年生の中から選ばれるんだけど」

「あー、なんか4月くらいに担任から聞いた気がする。2月中に立候補した人の中から投票だっけ」

「そうそう。で、今年生徒会長の園口くんは当時1年生だったんだけど、票数ダントツトップで生徒会長になった。しかもテニス部にも所属しているらしくって、去年は1年生でありながらレギュラーとして大会に出場、しかも彼が出て負けた試合は無かったとか」

「……何の漫画？」

1年生でレギュラー出場、しかも全試合負け無しって……。

僕は思わず、姉さんもついに現実と妄想の区別がなくなっただのかと疑ってしまった。

「実在してる人物だっば。しかも成績も優秀で、テストでは常に

学年10位以内なんだって」

「文武両道で2年生の超人生徒会長か……ますます漫画だなあ。で、その非現実的な存在が、姉さんに何の用なんだろうね」

「体育館裏つてことは、やっぱり告白なんじゃない？」

嬉しそうな声で、姉さんはそう言った。

どうやら、まんざらでもないようだ。

「なるほど、完全無欠と言われた今年の生徒会長は、年上の女性が好きかあ」

姉さんはどこか自慢げにそう呟く。

「……なるほど、完全無欠と言われた今年の生徒会長はロリコンだったのかあ……」

なんだかムカついたので、全力で皮肉で返す。

と同時に両腕を前に構えてガードの体勢。

予想通り、直後に姉さんが無言で飛び回し蹴りを放ってきた。

「読めてるよ！」 言いつつ腕で姉さんのケリを弾く。

「ちっ！ 大人しく食らええ！」

姉さんは着地するとすぐに、その反動を利用して後ろ回し蹴りで僕の中断を狙ってくる。

「させるか！」

流石にガードは間に合わないので、後ろに飛んでそれを避ける。

そしてステップから前進、殴りに行く。

もうお互いに攻撃パターンが分かっているため、最近の姉弟ゲン力は基本的に攻撃と回避の応酬になる。

それは日が沈んでから、二人がバテて飽きるまで続いた。

そして。

その後は若干険悪になったせいか生徒会長のことはそれ以上聞けないまま、今に至る、というわけだ。

なんだかんだで気にはなったので、僕は指定された場所である体

育館裏に潜んで、様子を見ることにしたのだった。

僕がここに来たのは帰りのホームルームが終わってすぐで、姉さんはその5分後くらいに、走ってきたのか少し息を切らせながらやってきた。

隠れている僕に気付いた様子は無かった。

姉さんは基本、思っていることが顔というか全身に出るので、僕を見つけているなら間違いないくらいかの反応を起こしている。

それが無いため、気付いていないと言えるのだった。

また、生徒会長はホームルームが長引いているのかまだ来ていない。

姉さんの表情は、僕に背を向けているため分からない。

しかし後姿でも、そわそわとした様子なのが分かる。

明らかに、生徒会長を待っていた。

なんだか、面白くなかった。

僕は姉さんに聞こえないよう、控えめにため息を吐く。

そもそもなんで、僕はこんなことをしているんだろう。

姉さんにカレシが出来ようが、僕には関係ないことだ。

というか今まで浮いた話なんて一度も無かったのだから、むしろ弟としては喜んでやるべきじゃないんだろうか。

そんなことを考えていると、がさ、と足音が聴こえてくる。

音が聞こえたほうに目をやると、そこには1人の男がいた。

近くの建造物から目算するに、身長は175cmくらい。

……姉さんとは、30cmものさし1.5本分以上の身長差があることになる。

さらにその男が近づいてくる。

その姿がはつきり見えて、僕は今度はやや荒っぽくため息を吐いた。

生徒会長が、想像以上のルックスだったからだ。

髪は見るからにさらさらで、顔立ちも整形でもしたんじゃないかと疑いたくなるくらいに整っている。

そして体つきもどつちかといえば細く見えるのだが、ちゃんと筋肉が付いているのが分かるためなんだか頼もしく見える。

いかにも女子にモテそうなタイプだった。

成績優秀スポーツ万能でさらにイケメン……どこの漫画の登場人物だと、改めて思ってしまった。

その男は、姉さんの姿を見つけるとまるでテレビのCMに出ている芸能人のような爽やかな笑顔で手を振った。

少女漫画なら、きつと齒が光って背景には薔薇がちりばめられていただろう。

……もう、いい。

これ以上、そこにいるのが嫌になった僕は、黙ってその場から駆け出した。

「んー……すつきりしないなあ」

適当に走って、気付くと商店街にいた僕は、そのままゲーセンに入って憂さ晴らしでもしようと格ゲーの筐体にコインを入れた。

しかしいまいち集中できず乱入してきた誰かにあっさり負けてしまい、何度か再戦を申し込むも返り討ちにあつて。

今は不貞腐れて、ゲーセン内のベンチでジュースを飲んでいるところだった。

なんだかんだで長い時間やっていたため、既に時刻は19時を回っている。

でも、なんだか帰りたくなかった。

帰って、姉さんに今日の話を聞くのが嫌だった。

さて、今からどうしようか……そんなことを考えていると。

携帯が震えた。

この震え方は電話だ。

姉さんだったらやだなあ……なんて思いながら、携帯の画面を見る。

そこには、『桜ノ宮広子』と表示されていた。

ヒロコさんからだ。

珍しいなと思いつつ電話に出た。

「はい、カズマです」

「今どこにいる？」

僕が答えると、ヒロコさんはすぐにそう訊ねてくる。

「えっと……アト学の傍のゲーセン、で分かります？」

ヒロコさんたちの家、反対方向だった気がするけど。

「ああ、あそこか。こんな時間にゲーセンにいるなんて、カズマは不良だなあ」

と思つたら、すぐに把握したようで、茶化すように僕にそんなことを言つてきた。

「……切りますよ？」

「あー、待つた待つた、悪かつたつて！」

何だか嫌な予感がしてきたので強引に切ろうとすると、ヒロコさんが慌てた様子で僕を止めてくる。

「もう、突っ込み担当のくせに沸点低いんだから……突っ込むの担当、ってなんかエロくない？」

「ナチュラルにセクハラ発言してないで、さつさと本題を話してください」

女性の先輩から男性の後輩にセクハラって、めつたに無いことだと思つんだけどなあ……。

「あー、ごめんごめん。えっと、今から学校に来れる？」

「は？」

あまりにもいつも通りのトーンで非常識なことを言うヒロコさんに、僕は思わず敬語を使うのも忘れて素で返してしまった。

「いや、今何時だと思つてるんですか」

とりあえず全力でヒロコさんに突っ込む。

ヒロコさんに突っ込む……いや、エロくなんか無いから。

「そうだね……PM7時半って言われるのと、19時半って言われ

るのどっちが好み？」

「AMとPMを略されると何時か分かりづらいので24時間制で言われる方が好きですが……ってそういう話じゃなくって。こんな時間に学校って、もう最終下校時刻過ぎてるじゃないですか」

アト学の最終下校時刻は19時である。

生徒会・部活共に例外は無く、生徒は必ずそれまでに下校しなければならぬ、と生徒手帳に明記されているのだ。

というか18時半くらいになったら、先生達に追い出され始める。以前放送部の会議が長引いていた時も、18時半になったら見回りの先生がやってきて早く帰れ、とどやされたのは記憶に新しい。

今から入ろうとしても、まず間違いなく門前払いを食らうだろう。「いったい、何をするつもりなんですか」

呆れながら、僕がそう訊ねると。

「もちろん」ヒロコさんは、とても楽しそうな声で。

「肝試しさ」

すでに辟易している僕に、そう言ったのだった。

——続く。

第06話：6月上旬、火曜日（後書き）

お楽しみいただけたでしょうか。

次回は、ヒロコさんとの肝試しです。多分。

第07話：6月上旬、火曜日（前書き）

前回の続き。

学校の七不思議ならぬ六不思議に挑もうとする、ヒロコとカズマの運命は？

第07話：6月上旬、火曜日

「こんばんわ、ヒロコさん」

学校から一番近いコンビニで立ち読みをしていたヒロコさんに、僕は声を掛けた。

「お、カズマ、来たか」

「ええ、来ましたよ」

僕は少し疲れた声でそう答える。

ヒロコさんに付き合うのは正直、色々と危険な気がしたのだが。それ以上に今はなんだか帰りたくなかったし、あるいは姉さんのことを、ヒロコさんに相談してもいいかもしれない。

そんな考えもあったため、結局付き合うことにしたのだ。

「ふふん、さすがはアタシの可愛い後輩君だねえ。時間は…… 19時45分。よし、行こうか」

「行かつて…… 本気なんですか？」

だから僕としては、ヒロコさんを止めてファミレスなりファーストフードなりで駄弁る方が好都合だったりする。

というわけで、僕は全力で止めに掛かった。

「もちろん」

だがヒロコさんは、いつも通りのやる気に満ちた笑顔で即答する。どうやら本気なのは間違いないようだ。

「どうやって入り込むんですか？ 校門は閉まってるし、絶対に警備してる人がいますよ？」

とりあえず、一番現実的な疑問をぶつけてみる。

「3年生を舐めないでほしいね。抜け道なんていくらでもあるさ」
怯んだ様子はまったく無い。

ヒロコさんはむしろ不敵な笑みすら浮かべて、そう返した。

「でも、万が一ばれたりしたら……内申に響きますよ?」

ならばヒロコさんが3年生、というのを逆手に取ってみる。

今年受験なのだから、問題を起こしたときのリスクは1年生の僕よりも高いはずだ。

「内申下がるのが怖くて、放送部にいられるかつての」

……確かに毎回、放送部で色々ギリギリ（アウト）な発言をしては姉さんに物理的にカットされてましたね。

激しく納得してしまった僕は、次の言葉を探した。

「んー……肝試して……普通7月か8月にやるもんじゃないですか?」

だったら、根幹を揺るがしに行こう。

もうこれしかない!

「やりたい時にやるから楽しいんじゃない」

しかし、一瞬の躊躇も無いままにヒロコさんはそう返した。

……ヒロコさんって、そういう人だね。

多分思い立ったから、で真冬でも肝試しの企画とか持ち出してくる気がする、この人。

「んー……」

「降参?」

次の言葉を考える僕に、ヒロコさんは誘うような瞳で訊ねてくる。

「……………」

必死で考えるが、正直もう何も思いつかなかった。

というか、何言ってもこの人には無駄な気がする。

「……わかりました、降参です」

僕は項垂れながらそう言った。

「よっしゃ、じゃあ行こうか! ついといで、カズマ!」

それから。

僕は嬉しそうなヒロコさんに手を引かれ、うんざりした気持ちで学校へと向かうのだった。

そして。

僕とヒロコさんは、無事校舎内に侵入していた。
何気なく携帯を開くと、時間は19:55と表示されている。
思ったより時間も掛かっていなかったようだ。

「……初めから、こうするつもりだったんですね？」

靴音が校舎内でやたらと響くのを気にしながら、僕は呆れた風に
そう言った。

「まあね」

対するヒロコさんは、得意げに放送準備室の鍵を指でくると
回している。

ヒロコさんが取った手段は、想像よりシンプルだった。

まず学校の敷地内には、鉤のついたロープで塀を越えるというま
るで忍者のような手を使った。

鉤を引つ掛けた場所も、本人曰く特に監視の薄いところらしい。
なぜそんなことを知っているのか、と訊ねたら放課後に調べたと
あっさり答えていた。

ついでになぜロープで壁を上るなんて芸当が出来るのかも訊ねた
が、そっちは『乙女の秘密』ということで教えてくれなかった。

乙女の秘密、というには物騒すぎる気はするんですが。

さらに言えばヒロコさんがその技術を習得しているのはいろんな
意味で危ない気がするのだが……もうそれは考えないことにした。

そんな感じで学校の敷地内に潜入した後は、再び鉤を使って校舎
の壁を上り、鍵が掛かっていない部屋の窓から入り込んだ。

もちろんその『窓に鍵が掛かっていない部屋』とは……放送準備
室、僕ら放送部の部室のことだ。

ヒロコさんは校舎の壁を上るとき、一直線に放送準備室の窓に向
かっていた。

どうやら、僕が想像していた以上に計画的な行動であるようだ。
「で、どうするんですかこれから」

というわけで、今後の計画を問いたただす。

「もちろん七不思議ならぬ六不思議を、ひとつずつ体験する。まずは無限階段から！」

「……やっぱり」

意気揚々、といった感じでヒロコさんは断言する。

対する僕はうんざりしているのを隠さずに、ため息を吐いた。

改めてヒロコさんの右手首を見ると、百均で売ってそうな安っぽいデジタル時計がついているのが分かる。

壊して抜け出すところまで体験する気満々のようだ。

「そういえば、あれって確か1階から3階に上がろうとして起こったんですよね。3階から降りる場合だとどうなるんでしょう」

無限階段の詳細を思い出しつつ、僕は素朴な疑問を口にした。

「ああ……それくらいは融通を利かせてくれるんじゃない？」

ヒロコさんがそれに、ちよつと不安げに返した。

「……融通を利かせてくれる怪奇現象ってあるんだろうか。」

「まあそんな難しそうな顔しないで。行こう？」

そんなことを考えていた僕の手を、ヒロコさんはそう言いながら引いていった。

そして。

「……………」

「……………」

僕とヒロコさんは、互いに何を言っていないかわからず、その場で黙り込んでいた。

ちなみに『その場』とは1階の廊下である。

そう、つまり。

僕とヒロコさんはあれから、普通に階段を降りて……何も起こらないまま、1階へとたどり着いたのだった。

いや、まあ常識的に考えれば当然のことなのだが。

「やっぱ何も起きないか」

苦笑いしつつ、ヒロコさんが沈黙を破った。

実際に何か起こるとは本人も思っていなかったのか、言葉通り『やっぱり』という顔をしている。

「他のも検証してみます？」

なんだかこのまま帰るのも寂しい……そう思った僕は、気付くとそんな提案をヒロコさんにしていた。

「アタシはかまわないけど……次、22時よ？　それまでどうする？」

「え、2時間後なんですか！？」

さらっと答えたヒロコさんに、僕は思わず驚きの声を返した。

その後慌てて口を塞ぐ。

ヒロコさんも慌てて自分の唇に人差し指を当て、いわゆる静かに！　のポーズをしていた。

あまりにもヒロコさんが堂々としていたので忘れかけていたが、僕とヒロコさんはここに忍び込んでいるのだ。

なるべく慎重にいかないと……。

「うん、2時間後だね。22時に、理科室の人体模型がブレイクダンスを始めるって話だから」

ひと通り落ち着いてから、気持ち控えめな声でヒロコさんが僕にそう解説してくれる。

「2時間か……長いなあ」

「見つかったら面倒だし、とりあえず部室に行こうか」

僕がばやくと、ヒロコさんがそう提案してきた。

「そうですね。2時間も警備の目を掻い潜りつつ時間つぶしなんてやってられませんし」

その提案に乗らない理由も無いため、僕は素直に頷いて部室を目指した。

さっきは降りた階段を、今度は二人で上がる。

現在時刻を携帯で見ると、20時08分と表示されていた。

A M・P M制で言うと8時8分、無限階段が発生した時間である。降りる時なんとも無かったのは、単に数分早かっただけだったらしい――？

脳裏にそんな考えが浮かんで、背筋に悪寒が走った。

ヒロコさんもそれに気付いたのか、僕と、自身の腕についている時計を交互に見つめている。

もしかしてまずいんじゃないか……そう思いながらも、僕とヒロコさんの足は止まらない。

そのまま、二人緊張感で声も出せないまま歩き続けて……3階にたどり着いた。

「つて、やっぱり何も起こらんのかい！」

僕は忍び込んでいるという事実も忘れて、大声で突っ込んでいた。「ばか、カズマ声大きい！」

ヒロコさんはそれを、慌てて咎める。

と、同時に。

「誰かいるのか？」

と、おじさんというにはやや若い……多分30代前半くらいの男の声が聞こえた。

視線の先には、懐中電灯の光らしきものが映っている。

どうやら、警備で回っている人がたまたま近くに来ていたようだった。

「まずい……カズマ、こっち！」

ヒロコさんは言うが早いか、僕の手を引いて物陰へと隠れ、僕に抱きついた。

「ヒ、ヒロコさんッ!？」

さすがに声を上げたらまずいことくらいは分かっているため、小声で僕はヒロコさんに抗議の声を上げる。

「しっ、静かにして！ 見つかったらまずいから」

しかしヒロコさんはそんな僕にかまうことなく、限界まで身をかがめて息を殺していた。

警備員の足音が、段々近づいてくるのが分かる。

「誰がいるのか？」

警備員は警戒している様子で、さっきと同じ台詞を言った。近くで、足音が響く。

もしかしたら、僕たちを探しているのかもしれない……と思いきや、足音は段々遠ざかっていった。

声のトーンも2度目はなんだかダルそうだったし、あまり仕事熱心な人では無かったのだろう。

隠れている僕らを、わざわざ探すことはしなかったようだ。

遠ざかる足音と一緒に、「気のせいか……」という呟きが聞こえたから、とりあえずは一安心である。

「……行つたみたいだな」

ヒロコさんも僕と同じ判断をしたのか、ようやく息を吐いてからそう言った。

「みたいですね……すいません」

僕は素直にヒロコさんに謝る。

さすがについ、ツツコミにチカラを入れすぎた。

「何、スリリングで楽しかったさ」

ヒロコさんは、それを爽やかに笑って許してくれた。

この気風のよさは、ヒロコさんの魅力の一つだと思う。

でも、僕が素直に謝ったのは……反省だけが理由では無い。

「なら良いんですが……そろそろ、放してもらえないでしょうか……」

……

僕は意を決してそう言った。

というのも、今僕は、相当きわどい状態にあるからだ。

警備員らしき人が去ってから、僕はここがどこかを認識した。

改めて考えてみれば、明らかに男性であつた警備員がここを探さなかったのは当然だろう。

ヒロコさんが僕の手を引いて逃げ込んだのは……女子トイレの、しかも個室の中だった。

それに気付くと、トイレ独特の臭いと、すぐ傍にいるヒロコさんの匂いが鼻を刺激する。

さらに隠れるためにヒロコさんに思いっきり引つ張られ、そのまま強く抱きしめられたこともあって、肌も完全に密着していた。

ヒロコさんの暖かさと柔らかさを、僕は今全身で感じてしまっている。

今見つかったいたら、間違いなく校内でアレな行為をしようとしていたカップルと勘違いされただろう。

「ん？ あー、ごめんごめん。じゃ、部室いこっか」

しかしヒロコさんはそれを気にする様子も無く、僕を普通に解放してからそう言った。

本当に、図太い人だ……。

僕は後ろで顔を真つ赤にしながら、ヒロコさんの後ろをついていった。

「さて、あと1時間30分か。何して暇を潰す？」

道中に警備員がいないことを確認してから、僕とヒロコさんは再び部室に入り込んでいた。

もちろん扉には鍵を掛けているし、電気もつけていない。

月の光だけが、今の僕らが頼れる唯一の明かりだった。

「……電気をつけるわけにもいかないですから、やれることも限られてますよね」

ヒロコさんの問いに、僕は考え込みながらそう呟く。
すると。

「……変なことしたら、イイ声で鳴くからね？」

ヒロコさんはいきなり四つんばいになって僕に近づき、耳もとでそんなことを囁いた。

吐息掛かっていて、それでいてどこか安らぎを感じさせる色っぽい声だった。

しかもそれを言った時、僕の耳にはヒロコさんの息が掛かる。思わず背筋がぞくつとなった。

「しませんよっ！」

僕はヒロコさんから逃げるように下がりつつ、控えめな声量を維持しつつ全力でツッコんだ。

下手に乗ると、僕の貞操が危ない。

ヒロコさんはそんな僕を見て、あっさりいつもの笑顔に戻ると身体を起こしてその場で胡坐をかいた。

その瞬間、白い太ももの奥に黒いものが見えた気がした。

いや、何も見えていないことにしよう。

「カズマ、顔が真っ赤じゃん？ 何か見えた？」

なんて思っている、ヒロコさんが冷やかすようにそんなことを言ってきた。

「見えてないです、黒なんて！」

僕は慌てて否定する。

「……いや、ばっちり見えてるじゃん」

ヒロコさんはからからと笑いながらそうツッコんだ。

……否定できてなかった。

「ま、いいんだけどね。カズマもなんていうか……ヘタレというかチキンだね。あるいは、好きな人でもいるの？」

ヒロコさんは楽しそうに、そんなことを言ってきた。

そう言われて、僕はようやくヒロコさんに聞きたかったことを思い出す。

もちろん、姉さんのことだ。

「んー……それなら、聞きたいことがあるんですが」

「お、なにになに？」

僕が切り出そうとすると、ヒロコさんは嬉しそうに反応した。

顔に『待ってました！』と浮き出ているような気さえする。

その反応を見て、僕は少し考えた。

そつえば姉さん、ヒロコさんに生徒会長から呼び出されたこと

を話しているんだろうか。

なんとなくだが……話していないような気がする。
確か姉さんとヒロコさんは別のクラスだったはずだ。

さらに言えばヒロコさんは、今までの話から察するに一日中、夜こつやつて潜入するための情報収集をしていたと考えて良さそうだから知らないかもしれない。

だったら、姉さんのことはまだ直接話さない方がいいんじゃないだろうか。

ふと、そんなことを思った。

「あ、えつと……」

そこまで考えてから、僕は思わず言葉を止める。

なら、質問は慎重にした方がいい。

変に姉さんを話題に出すと、ヒロコさんは鋭いから感付くに違いない。

「えつと、仮の話なんですけど。例えば……シズネにカレシが出来るとしたら、ヒロコさんはどう思います？」

ヒロコさん自身に置き換えて、訊ねてみることにした。

立場的にはヒロコさんよりもむしろシズネの方が相応しいのだが、感の鋭さまで考慮したら相談相手はヒロコさんで間違いないだろう。

「……ふーん、なるほどね」

少し考えてから、ヒロコさんはにやりと笑ってそう言った。

僕のことを、意味深に見つめながら。

「なるほど、カズマの気持ちはよく分かったよ。そだね、アタシは

……シズネが幸せなら、それが一番だ」

「ヒロコさん……」

僕をからかうような言葉の直後、急に真面目な声で。

ヒロコさんは、そう言った。

声のトーンから、ヒロコさんがシズネをどれだけ大切に思っているかが感じ取れた。

正直、放送部の3きょうだいの中ではあまり仲が良くない姉妹だ

と思っていた。

でも、実際そんなことは全然無かったようだ。

むしろ、家族を想う気持ちは僕より強い……そう感じさせられた。「やっぱりあの子は、アタシにとっては大切な家族だから。まあ姉としては、先越されるのはちょっと悔しいけどね。でもそれ以上に、アタシはあの子には幸せでいてほしいと想うんだよ」

ヒロコさんは意志のこもった瞳で、僕をまっすぐ見てそう断言した。

迷いなんてまったく無い。

それがヒロコさんの、揺るがない本心であることが伝わってきた。

……確かに、そうかもしれない。

僕もなんだかんだで、姉さんの笑顔を見るのは好きだ。

そして逆に姉さんが悲しそうな顔をしていると、僕までなんだか憂鬱になる。

きつと家族とはそういうものなのだろう。

そこまで考えた時。

僕はやっと、姉さんを祝福してあげようという気になれた。

相手の人だつて聞いている限りじゃ成績優秀、スポーツ万能な生徒会長とケチをつけるところなんかありやしない。

そんな人が姉さんに告白してきてくれたのだから、これ以上喜ばしいことも無いはずだ。

僕が内心で、そんな答えを出した時。

「よし……じゃあ、今日はもうこれで帰ろうか」

ヒロコさんが、僕にそう提案してきた。

「いいんですか？」

答えが出た今、正直この申し出は有り難かった。

でも、なんだか僕の勝手な都合で解散にしまったような気がして、僕はそう訊ねる。

「かまわないよ。アタシも帰ってやりたいことが出来たからね」
だがヒロコさんはそう言って、あっさり解散を決定した。

そうと決まったら、行動は速かった。

来た道を戻り、あっさりと校舎の外に出る。

そして、そのままヒロコさんに別れを告げ、僕は帰路についた。

帰って、姉さんに『おめでとう』と言ったために。

今なら、姉さんがどんなうっとおしい自慢をしてきても笑って祝福できる気がする。

僕はそんな晴れやかな気持ちで、家へと走るのだった。

—— 続く。

第07話：6月上旬、火曜日（後書き）

ありがとうございました。
続きはまた来週に！

第08話：6月上旬、火曜日、水曜日（前書き）

前回の続き。

ヒロコに諭されたカズマと、告白されたはずのマドカは？
第08話、お楽しみください。

第08話：6月上旬、火曜日、水曜日

夜の帳が降りきつてもなお見慣れたと感じられる町を、僕は走っていた。

走りながら、僕は昔のことを思い出す。

それは、姉さんが中学1年生、僕が小学5年生だった頃の話。ある日姉さんは、傷だらけの格好で泣きながら帰ってきた。制服である半袖のシャツは刃物で切られたような傷がついていて、少し血が滲んでいる。

スカートも同じように埃と切り傷でいっぱいという……今見たら、暴漢が変質者に襲われたとしか思えないような酷い有様だった。

そんな姿を見て、僕は読んでいた本も投げ捨て、慌てた様子で訊ねる。

「おねえちゃん、どうしたの!？」

今思い返すと、『おねえちゃん』という響きが懐かしい。姉さんと呼ぶようになったのはいつ頃だったっけ……まあそれはいいか。それから、姉さんは泣きながらも何があったのかを語ってくれた。終始しゃくりあげながらという聞き取りづらい事この上ない様子だったのだが、当時の僕は純粹無垢かつ素直だったので、根気良く姉に何があったのかを聞きだしていた。

そして、多分30分後くらいに。

「……つまり、近所の空き地にいたネコとケンカして、そうなったってこと?」

僕は、最初の心配そうな雰囲気はどこへやらの完全にあきれ返った様子でそう確認した。

今思い返してみても、違っているのは制服だけで外見がまったく成長していない姉さんが、乱れてくしゃくしゃになったツインテールを揺らして首を縦に振る。一緒に揺れたリボンが三毛猫柄なのは、もはや皮肉の領域だった。

そしてそこまで考えた当時の僕は、もうその時点で相手にするのが馬鹿らしくなって。

既にその辺りから、姉さんの話を適当に聞き流していた。

……あれ、当時の僕、純粹無垢でも根気良くも無いな……まあいいか。

そんな感じで僕はどんどん興味を失っていったのだが、姉さんは逆に僕に話し終えたことでまた戦意が湧いてきたらしく、「リベンジしてくる」と一度呟いて、着替えてからまた出掛けてしまったのだった。

そんな姉を『飽きずによくやるなあ』などと思いつつ見送った僕は、リビングに戻ってさつき投げてしまった本を拾い、どこまで読んだっけ……などと思いながら、本を開くのだった。

そして、その本をちょうど読み終わった頃、姉さんは帰ってきた。良く見ると腕も脚も……というか体中が擦り傷切り傷だらけだった。

しかし、顔だけは晴れ晴れとしている。

「見なさい、カズマ！」

その顔が示すとおりの晴れ晴れとした声で、姉さんは誇らしげにそう言つて、自分の後方に視線を送る。

姉さんの視線の先を眼で追うと、そこには一匹のトラネコがいた。無駄な肉が一切無い、均整の取れたしなやかな体つき。

さらにはちよつとでも隙を見せたら狩られてしまいそうな、力強い野生の光を宿した瞳。

このネコ、相当なツワモノだ。

当時の僕は、子供心に一目でそう思った。

「この子はフアング。名前の由来は、私を一度退けたその強力なツ

メ。今日から、この子はフアングよ！」

トラネコ改めフアングを見つめながら、姉さんは得意げにそう言った。

なおこの後、父さんにフアング（fang）は『爪』じゃなくて『牙』だ、と苦笑いで訂正されることになるのだが、それはまた別のお話。

これ以外にも、たくさんの姉さんとの思い出が頭を巡っていった。それこそ、思い出しきれないくらいに。

なんだかんだで、僕と姉さんは一般的な姉弟としても仲のいい方だと思う。

だから、正直に言えば姉さんに恋人が出来てしまうのは寂しかった。

もちろん今までに、姉さんが遠くに行ってしまうように感じたことが無かったわけではない。

過去にそれを一番強く意識したのは……多分、姉さんが中学に上がった年だ。

4年間ずっと一緒に通い続けていた小学校に、いきなり1人で行かないといけなくなった、というのが当時の僕にはなんだか凄く寂しく感じられた。

いつも当たり前のように隣にいた人が、急に居なくなったのだから。

履き慣れていた靴が何の脈絡も無く壊れてしまったような、あるいは使い慣れていた文房具をなくしてしまったような……普通に生活するには困らないのだが、何か物足りなく感じる、そんな喪失感があった。

しかしそれでも、家に帰れば、あるいは家で待っていれば姉さんに会えた。

でも、姉さんに恋人が出来るとしたら、そういうわけにもいかな

いだろう。

恋人の家に泊まって、帰ってこない日なんてのもあるかもしれない。

だから、帰れば姉さんに会えるという安心感が……それすらもが崩れてしまいそう、姉さんに恋人が出来ることを僕は素直に喜べなかった。

でも。

ヒロコさんは、それで家族が……自分が大切に思っている人が幸せになれるなら構わない。

そんな考え方を僕に教えてくれた。

それでいいんだと、気付かせてくれた。

確かに、そうだと思えた。

やっぱり姉さんは、僕の家族なのだから。

姉さんが幸せなら、僕にとっても喜ばしいことだ。

もし立場が逆だったなら、なんだかんだ言いつつも姉さんは僕を祝福してくれただろう。

だから、僕も姉さんを祝福してあげよう。

それが今、僕が姉さんにしてあげられる一番のことだと思った。

そこまで考えて、僕はさらに走るスピードを上げた。

ひたすらに。

ひたむきに。

僕と僕の家族が住んでいる家へ、全力で駆けていった。

僕の大切な家族に、祝福の言葉を伝えるために。

家の前に着く。

ポケットから鍵を取り出し、ガチャガチャと回していると、足音が玄関に近づいてくるのが分かった。

やや足音が軽い。姉さんだ。

鍵を開ける音で、僕の帰りに気付いたのだろう。

どうやら、自慢する気満々らしい。

いいさ、今日は存分にそれを聞いて、存分に祝ってやろう。

僕はそんな懐の大きいことを思いながら、ドアを開けた。

玄関には、想像通り姉さんが待っていた。

「ただいま！　姉さん、おめでとう！」

僕は帰宅と同時に、自分が出来る最大限の笑顔で姉さんにそう告げる。

「うわあああああ、カズマあああああ！」

一方姉さんは号泣しながら、僕に抱きついてきた。
「つてあれええええ！」

「え？　なんで？　どういうこと？」

姉さんの行動があまりにも予想外すぎて、僕は思い切り狼狽していた。

「えぐ、えぐ、がいじょうが……うええええええん」

姉さんが何か言おうとしている。

だがしゃくりあげながら話しているせいでまったく聞き取れない。

「え、待つて姉さん！？　いきなりどうしたのさ！？　つてか何があつたのさ！？」

冷静さを取り戻せないまま、僕は姉さんに訊ねていた。

「あらあら、カズマつたら。今でもお姉ちゃんにべつたりね」

しかし姉さんより先に、姉さんの声を聞いて様子を見に来た母さんが、何か微笑ましいものでも見るような雰囲気をも少し出しつつ、そう言うてから通り過ぎていった。

良く見てください母さん、僕は抱きつかれている方です。

そう母さんにツツコミを入れるよりも、姉さんの方が気になったため僕は母さんを放置して姉さんの話を聞くことにした。

さすがに玄関で続行すると母さんに何を言われるか分からないので、僕の部屋に移動してから。

そして。

姉さんをベッドに腰掛けさせて、根気良く話を聞くこと30分。

僕はようやく、姉さんに何があったのかを理解できた。

「……つまり、要約すると。放課後生徒会長には会えたけど、生徒会長は姉さんの予想外な小ささに引いたらしくて、結局告白もうやむやにされてしまった、と」

「……そう言われるとシヤクだけどあつてる」

僕がそう確認すると、姉さんはしぶしぶ、と言った感じで頷く。

姉さんももう、普通に話せる程度には落ち着いているようだ。

「そっか……生徒会長、姉さんの言うとおり年上がタイプだったのかな」

「……どういう意味よ」

僕が納得したように呟くと、それを耳ざとく聴き取った姉さんに睨まれた。

「だから、やっぱり姉さんは子どもっぽいつてことだよ。姉さんなんかと付き合つてたら、ロリコン扱いされてもおかしくないって」

しかし僕は怯まず、茶化すようにそう返した。

「なんですつてえーッ！ 誰が子どもなのよッ！」

姉さんは、ネコが威嚇するような雰囲気で怒っている。

「だって、姉さんと出掛けたら、知らないおばちゃんにしょっちゅう、『あら、お兄ちゃんとお買い物？ いいわねえ』なんて言われているじゃないか。姉さん、僕の姉に見えないんだよ」

「キーツ、食らえッ！」

遂にキレたらしく、姉さんはベッドから飛び降りると座ったままの僕に回し蹴りを放ってきた。

僕はそれを両腕でガードする。

僕に攻撃を止められた姉さんは少し下がって体勢を立て直すと、そのまま飛び膝蹴りで僕に襲い掛かってきた。

さすがにこれは受けきれない、そう思った僕は横に避けようとしたが……座っていたせいか、巧く避けることが出来なくて。
「くっ！」

結局姉さんの飛び膝蹴りを食らう羽目になってしまった。

急所は腕でガードしたため痛みは無いが、ベッドに押し倒され、馬乗りされた状態になっている。

「さあて、ここからどうしてやろうかしら……」

僕を見下ろしながら、姉さんは不敵に笑う。

やや視線を落とすと、飛び膝蹴りの勢いで捲くれ上がったのか、水玉模様の下着が丸見えになっていた。

や、まあそれは別にどうでもいいんだが。今更姉のパンツなど見えても嬉しくないし。

ついでに言えば、胸にのしかかっている姉さんも実はそこまで重くない。

その気になれば振り落とせそうだが……やめた。落ち込んでいる姉さんを見なくなかったからだ。

だから、僕とケンカすることですもの快活さを取り戻してほしかった。

それが、今の僕に出来る姉さんの慰め方だった。

……よく考えるとけっこうマゾいことやってる気がするけど。

そんなことを思いながら、姉さんからの追撃が無いことに気付く。

「……姉さん？」

気になって姉さんの顔を見る。

その顔は……どこか、穏やかなものだった。

「……ふう。やっぱ、いいか」

姉さんはそう呟くと、僕の上からあつさり降りる。

「姉さん？」

そんな姉さんが気になって、僕は思わず声を掛けた。すると。

姉さんは笑って、

「ありがとう、カズマ。おかげですつきりしたよ。恋人が出来なかったのは残念だけど……ま、今の私にはカズマがいるし。今日はこのくらいで許してあげる」
そう言った。

とっても自然で、可愛らしい笑顔だった。

太陽のような、暖かくて眩しい笑顔。

「僕を恋人の代わりにするのはやめてくれないかな」

僕はそんな姉さんを何故か直視できなくて。

顔を背けて、ややぶつきらばうに返してしまった。

「えへへ。いいじゃない、カズマだって恋人いないんだし。それに私たちは家族なんだから、仲良いのが普通でしょ？」

「まあ、そうだけどさ」

嘆息しながら、僕は答えた。

僕がしぶしぶながら肯定すると、姉さんはそれで満足したのか、「よろしい！ それじゃあお休み！」と上機嫌で部屋に戻っていった。

憑き物が落ちたような晴れ晴れとした顔つきで。

互いに恋人がいない姉弟だから、どっちかに恋人が出来るまではお互いがその代わり……か。

ちよつと恥ずかしい気もするけど、僕はそれ以上に暖かさを感じていた。

姉さんのことも、もう心配しなくて大丈夫だろう。

明日から……というかもう既に今から、いつもの姉さんに戻っていたのだから。

これでようやく、僕たちに平和な日常が戻った——そう確信した僕は、気が抜けてしまったのか、気付くと制服姿のまま眠ってしまった。

「うーん、まだ首が痛い……」

制服姿のまま姉さんに起こされた僕は、軽くシャワーを浴びてから朝食を取って姉さんとともに学校に向かった。

「もう、変な体勢で寝るからだよ。あれほど暖かくして寝なさいって言ったのに」

僕が愚痴ると、姉さんがそう返してくる。

「いや、今6月だし、暖かくしようとしたら暑くて寝られないから。つてかそれ以前に言われてないし、それ」

とりあえず突っ込めるところ全てに突っ込んでおいた。

なんだかこの、他愛の無い会話が懐かしい。

実際はせいぜい1日ぶりくらいであるため、懐かしがるほどのことでもないのだが。

それでも、僕は、当たり前ということの大切さを昨日思い知った気がする。

この日常を、今は満喫していても良いだろう……そんなことを考えながら、姉さんとの他愛ない会話を続けていると。

校門前に、長い黒髪に銀枠で楕円形の眼鏡を掛けた、見慣れた少女がいることに気付いた。

「シズネ。おはよう」

誰かを待っているような雰囲気 of シズネに、僕は何気なく声を掛ける。

するとシズネは嬉しそうに、薄い夏服のせいか服の上からでもはつきり分かる胸を揺らして答えた。

「はい、おはようございます……えっと、旦那さま」

いつも能天気でマイペース、柔らかな微笑み顔が特徴のシズネとしては珍しく、やや恥ずかしそうで頬は朱に染まっている。

その仕草は正直、凄く可愛いのだが……それよりも今、もっと気にすべき発現があった気がする。

「えっと……シズネ、今なんて？」

というわけで、僕は迷わずに聞き返した。

「……えっと、ダーリンとかあなた、とか呼ぶ方が好みでした？」
すると不安そうな顔で、シズネもそう聞き返してくれた。

ここまでシズネが感情をあらわにするのも珍しい……のだが今はそれを気にしている場合じゃない。

「ち、ちよっとカズマ!？ いったいどういうこと!？ シズネち

やんがカズマを、だ、旦那さまって!？」

僕が一瞬考え込んでいた隙に、姉さんが根本的な問題に大慌てで突っ込んだ。

……どうやらまた、非日常がやってきてしまったらしい。

——続く。

第08話：6月上旬、火曜日、水曜日（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか。

マドカの件が解決したと思いきや、再び平穏とは程遠いカズマの日常。

今回はシズネとヒロコの姉妹が暴走します、多分。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2226y/>

門真一馬の愛すべき日常

2011年12月24日13時47分発行